舟 岡 古 墳

附　万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査

２００５年１２月

香川県香川町教育委員会

例　言

1　本報告書は，個人住宅改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書で，香川県香川郡香川町浅野 253-1 および 255-2 番地に所在する舟岡古墳の試掘調査報告を収録した。また，合わせて香川町立浅野小学校に保管されている万塚古墳・剣山古墳等の出土遺物についても調査した。

2　試掘調査および整理作業については，香川町教育委員会が実施し，高松市教育委員会が協力した。

3　事業費は，香川町が全額を負担した。

4　調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略，五十音順）

香川県教育委員会，香川県文化財保護協会，香川町立浅野小学校
井上勝之，上原敏紳，中原耕男，信里芳紀，御厨義道，向井郁夫，山下平重

5　舟岡古墳の調査は，下記のとおり実施した。

【試掘調査】　平成１７年９月１日～２日
香川町教育委員会 社会教育課 係長　中原裕二
高松市教育委員会 文化部文化振興課 文化財専門員　川畑 聰

【整理作業】　平成１７年９月５日～１０月３１日
発掘調査と同じ

6　本報告書の執筆・編集は，第１章を中原，第２～５章を川畑が担当した。

7　本報告書掲載遺物の写真撮影は，高松市教育委員会 文化部文化振興課 文化財専門員 大嶋和則が担当した。ただし，図版 7-10-15，浅野八王子古墳出土遺物は，町教委の遺物管理アルバムのものを使用した。

8　本文の挿図として，国土地理院発行５万分の１地形図「高松南部」および香川町都市計画図２千５百分の１「香川町都市計画図　№.3」を一部改変して使用した。

9　本報告書の高度値は，海抜高を表す。第２・11 図の方位は真北を表し，他の図面の方位は磁北を表す。

10　巻末の「万塚古墳発掘調査報告」「香川町浅野八王子古墳調査報告」は，香川県文化財保護協会発行の『文化財協会報』から転載した。ただし，図面については再トレースするとともに，写真については掲載していない。また，明らかな誤字や誤植については修正した。

目　次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 3
第２節　調査の経過 …… 3
第３節　調査後の経過 …… 3

第２章　地理的環境・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 4

第３章　調査の成果
第１節　調査前の状況 …… 6
第２節　調査の概要 …… 7
第３節　墳　　丘 …… 8
第４節　埋葬主体部 …… 8

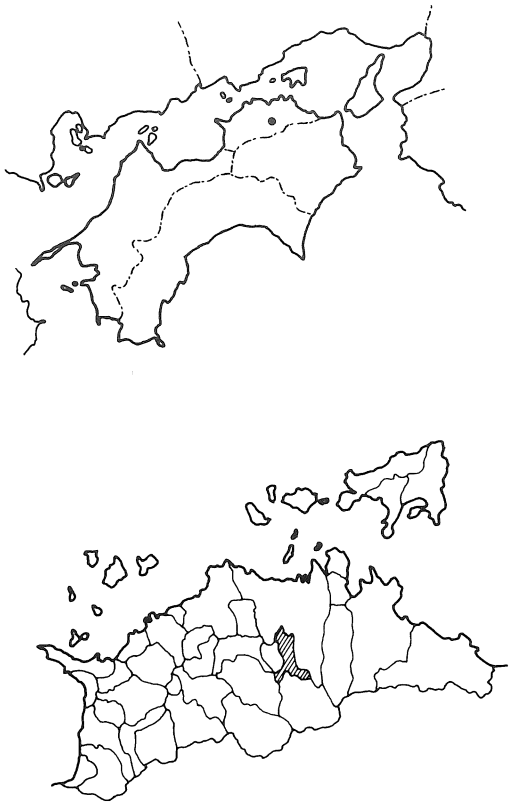
第４章　まとめ
第１節　古墳の年代 …… 9
第２節　舟岡古墳と香川町内の後期古墳 …… 9
第３節　舟岡古墳周辺の調査について …… 10
第４節　(伝) 舟岡出土の舟形石棺について …… 10

第５章　万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査
第１節　万塚古墳出土遺物 …… 11
第２節　剣山古墳出土遺物 …… 14
第３節　出土地不明遺物 …… 17
第４節　下赤坂出土遺物 …… 18

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成17年８月に，舟岡古墳の地権者より，個人住宅改築工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の照会が香川町教育委員会にあった。工事の内容は，車両用進入路を新設するため，古墳から南に伸びている低い盛土を除去するというものであった。当町教育委員会では，工事予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地であることから，地権者に文化財保護法第93条に基づく発掘届出を香川県教委に提出していただくとともに，香川県教委および地権者と協議を行った結果，平成17年９月に包蔵地の性格を把握するために試掘調査を実施することになった。なお，香川町教育委員会には文化財専門員が不在のため，高松市教育委員会から文化財専門員派遣の協力を受けた。



第１図　香川町位置図

第２節　調査の経過

試掘調査は，平成17年９月１日～２日にかけて実施した。調査は，工事予定地である墳丘から南側の盛土にかけて，南北約９ｍのトレンチを設定し，重機による機械掘削を実施した。その結果，南側盛土は江戸時代以降のものであることが明らかになるとともに，墳丘の一部が工事予定地に含まれることが判明した。トレンチ壁面の土層図を作成するとともに，写真撮影を行い，トレンチの一部を埋め戻した。また，墳丘東斜面には石室の一部と考えられる川原石の石積みが露出していたため，東斜面を人力により精査し，石積みの検出作業を実施した。その結果，東西方向の横穴式石室であることが判明し，当古墳が古墳時代後期のものであることが明らかになった。検出した範囲で石室の実測図を作成するとともに，写真撮影を行い，石室石積みを土のう袋によって養生することにより崩落回避の措置をとった。さらに，墳丘および南側盛土を対象にした平板測量を実施した。

第３節　調査後の経過

試掘調査の結果，工事予定範囲に墳丘の一部が含まれることから，香川県教委の指導により，工事中の立会を平成17年９月３日に行った。工事中に，墳丘の一部が想定通り露出したものの，それ以外の遺構・遺物とも確認されなかった。

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

香川町は，香川県のほぼ中央に位置すると同時に，地形的に見れば高松平野の南端部にあたる。そのため，香川町の北部は平野沖積地帯，南部は阿讃山脈から連なる丘陵地帯となっている。この高松平野は，香川町の西端を南北に流れる香東川によって形成された扇状地で，東西 20 ㎞・南北 16km の規模をもつ。一方，阿讃山脈を縫うように流れてきた香東川は，丘陵地帯が切れる部分から北流し，瀬戸内海へと注ぎ込んでいる。

舟岡古墳は，阿讃山脈縁辺に形成された独立丘陵である舟岡山東側の平地に立地し，香東川の東側に位置する。標高は 55 m前後である。

第２節　歴史的環境

香川町では，現在のところ，旧石器・縄文時代の遺跡や遺物は発見されていない。

弥生時代でも，明確な遺跡はまだ発見されていないが，舟岡山や新池で石庖丁や石鏃が採集されている。さらに，香川町の西側に位置する香南町では，弥生時代後期の集落跡である岡清水遺跡が所在することから，これから香川町でも弥生時代の遺跡が発見される可能性は高い。

古墳時代になると，明確に遺跡が認められるようになる。前期では，双方中円墳または前方後円墳と考えられている舟岡山古墳が独立丘陵上に築かれ，ここから特殊器台片が出土している。また，浅野小学校では，舟岡周辺から出土したと伝えられる刳抜式石棺が保管されており，前期～中期のものである。

古墳時代でも後期後半になると，横穴式石室をもった古墳が多く築かれるようになる。香川町内の中央から北東部にかけての独立丘陵上に，万塚古墳・八王子古墳・東赤坂古墳（町指定史跡）・横岡山古墳（町指定史跡）などが築かれている。一方，丘陵上とは違い，舟岡山東側の平地では，今回報告する舟岡古墳が所在している。

古代の香川町は旧香川郡に属し，町内の北半部は大野郷に，南半部は井原郷に比定されている。香川郡には秦氏が多く居住していたことが，平城京から出土した木簡などから窺い知ることができる。しかし，今のところ古代の遺跡は発見されていない。

中世になると，香川町内でも武士階級の城館が築かれる。香東川流域の平野部には，大野北城・大野南城・龍満城・乾城・箭造城が所在している。さらに，高松空港南側の山間部には鳥屋城がある。香川町以外では，香東川西岸の平野部に由佐城・行業城などがあり，南部の山間部には山城である音川城・東谷城などがある。

近世になると，讃岐国（香川県）は生駒親正によって統治される。生駒家が４代で転封となった後は，香川町を含む讃岐国東部は，松平頼重が初代となった高松藩に属し，明治維新を迎えることとなる。

《参考文献》

香川町教育委員会　『龍満城跡』　2000 年
香川町教育委員会　『龍満山古墳群～１号墳～』　2003 年
香川町誌編集委員会　『香川町誌』　1993 年
香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター
『国道 193 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　岡清水遺跡』　2001 年

1　龍満山古墳群	16　矢野面古墳	31　龍満城跡	46　鳥屋城跡
2　石舟池古墳群	17　万塚古墳	32　吉光城跡	47　音川城跡
3　三谷石舟古墳	18　八王子古墳	33　佐賀神社古墳	48　東谷城跡
4　三谷城跡	19　東赤坂古墳	34　池内城跡	49　好広城跡
5　通谷遺跡	20　百相坂遺跡	35　横井城跡	50　神内城跡
6　三谷三郎池西岸窯跡	21　舟岡山古墳	36　由佐城跡	51　円養寺遺跡
7　平石上１号墳	**22　舟岡古墳**	37　乾城跡	52　向井山城跡
8　平石上２号墳	23　大野北城跡	38　箭造城跡	53　鎌野城跡
9　平石上３号墳	24　大野南城跡	39　行業城跡	54　本村古墳群
10　小日山１号墳	25　中田井城跡	40　岡館跡	55　大亀古墳群
11　小日山２号墳	26　若宮神社古墳	41　高野神社古墳	56　尾越古墳
12　日山山頂古墳	27　剣山古墳	42　茶園窯跡	57　上佐山城跡
13　北山古墳群	28　横岡山古墳	43　大坪窯跡	58　中山田遺跡
14　雨山南遺跡	29　清谷古墳群	44　城所山１・２号墳	59　中山田古墳群
15　雨山南古墳群	30　油山古墳群	45　岡清水遺跡	60　上佐山東麓古墳

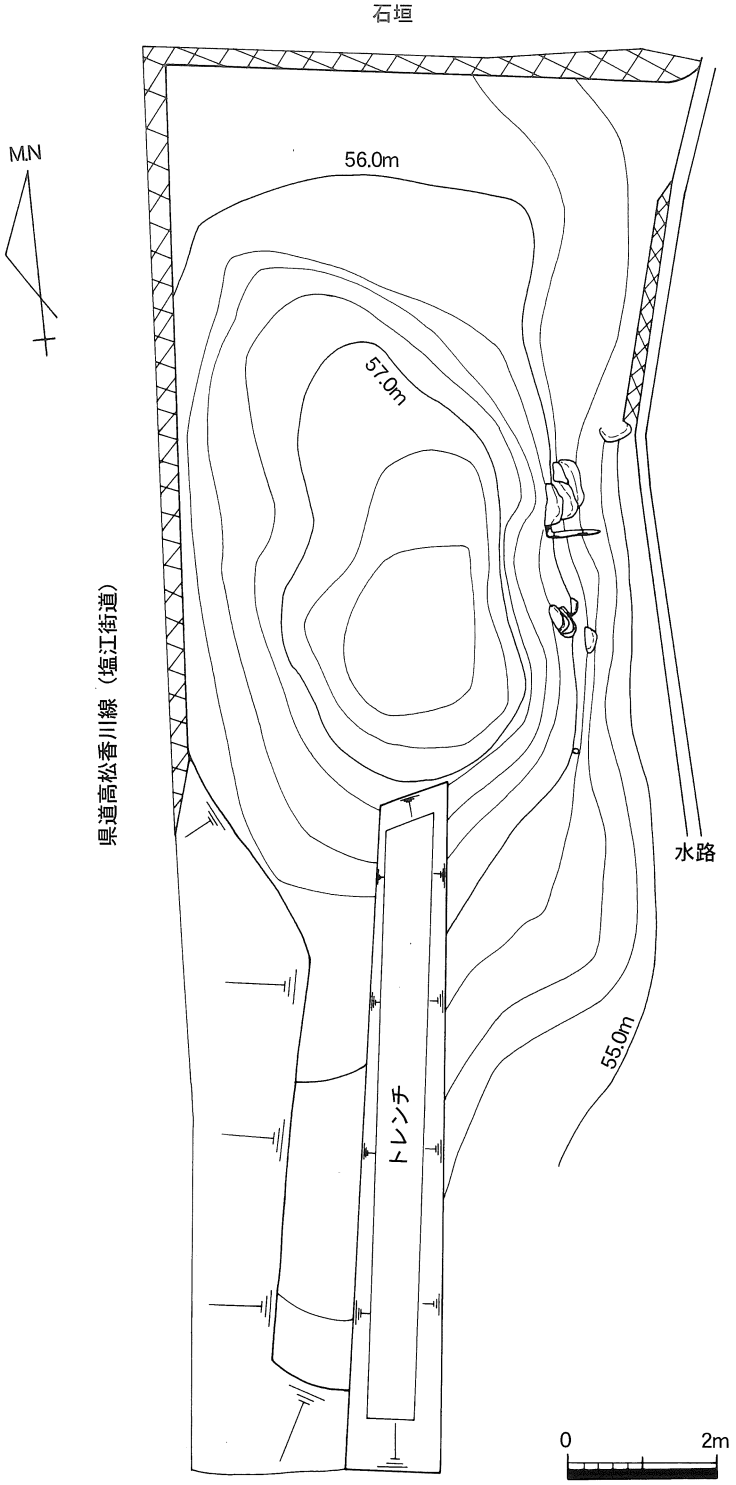
第２図　周辺遺跡分布図（縮尺１/50,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査前の状況（第３図）

舟岡古墳は，高松平野を南北に流れる香東川から東へ約1.8㎞離れた平地にあり，標高は約55ｍを測る。舟岡古墳の北西には，標高86ｍの独立丘陵である舟岡山があり，西には溜池である舟岡池が水を湛えている。古墳と池の間にある浅野出水からは豊富な水が湧出しており，下流域の水田を潤している。かつては，この地域ものどかな田園地帯であったが，市街化の波が押し寄せている。

調査前の古墳墳丘は，南北約11ｍ，東西約６～７ｍ，高さ約2.5ｍの不整な長方形で，東北西の三方に土留め用の石垣が造られている。さらに墳丘南側には，南北約８ｍ，東西約３ｍの盛土が取り付いていた。墳丘西側に隣接して，県道高松香川線（塩江街道，旧国道193号線）が南北に走っており，拡幅工事等によって墳丘の一部が削られたようで，石垣は西側が高さ約１ｍともっとも高い。反対側の墳丘東側は，家屋に隣接しており，こちらも墳丘が大きく削られたために急傾斜となっている。この急傾斜である東側斜面には，石室の一部と考えられる川原石の石積みが露出していた。墳丘上面は，若干の低木と雑草によって覆われていた。

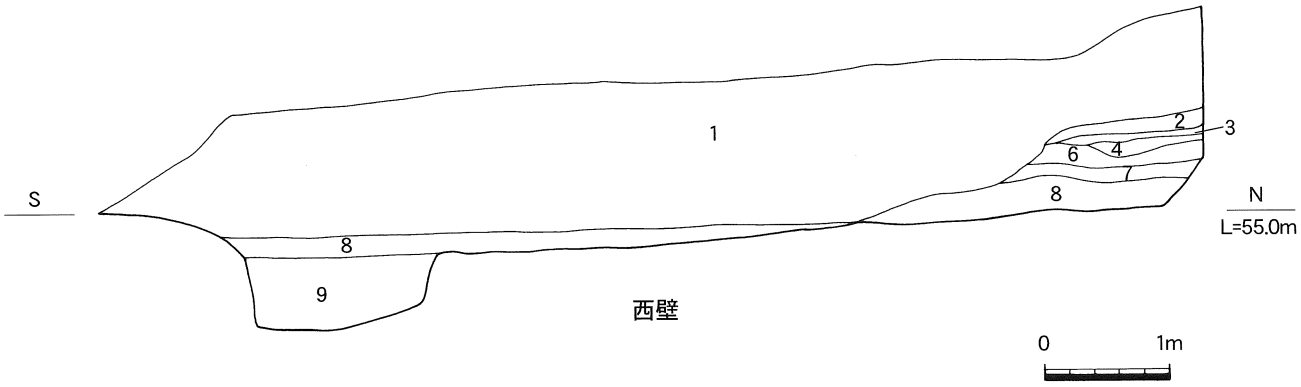


第３図　墳丘測量図（縮尺 1/100）

第２節　調査の概要（第４図）

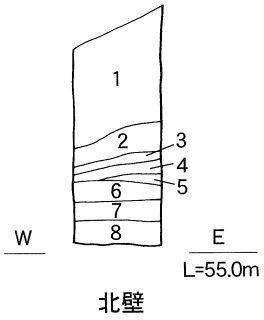
調査は，工事により除去される予定である墳丘南側の盛土に，南北約９ｍ，東西約１ｍのトレンチを設定し，重機による機械掘削を実施した。掘削深度は，工事により削平されるレベル（西側県道の標高）までとしたが，一部において地盤を調査するために深く掘削している。その結果，トレンチ北端から南へ約 1.3 ｍの範囲において，墳丘の一部と考えられる版築された盛土を確認した。第２～６層がこれに該当し，第７層以下が表土層・地山に相当する。一方，南側盛土を形成していた第１層は，江戸時代以降の瓦・陶磁器を含むことから，古墳とは関係がない後世のものであることが判明した。

トレンチ調査と並行して，古墳の内容を把握するため，墳丘東斜面を人力により精査し，石積みの検出作業を実施した。作業は，石積みが墳丘奥まで続いているかを確認するため，石の小口面を揃えている南側を掘削するとともに，その対となる石積みを確認するための精査であった。その結果，露出していた石積みが横穴式石室の北側壁であり，それと対をなす南側壁と考えられる石積みも確認することができた。これにより，舟岡古墳は，東西方向の幅約 1.5 ｍを測る小型の横穴式石室をもつことが判明した。



土層名

1　褐灰（5YR5/1）～黒褐色（5YR2/1）細砂（盛土，瓦・陶磁器を含む）
2　淡黄色（2.5Y8/3）シルト質極細砂（堅い，墳丘・版築）
3　褐灰色（10YR6/1）シルト質極細砂（堅い，墳丘・版築）
4　淡黄色（2.5Y8/3）シルト質極細砂（堅い，第６層をブロック状に含む，墳丘・版築）
5　にぶい黄橙色（10YR7/4）シルト質極細砂（堅い，墳丘・版築）
6　褐灰色（10YR6/1）シルト質極細砂（堅い，墳丘・版築）
7　灰黄褐色（10YR4/2）シルト質極細砂（古墳築造時の表土層）
8　淡黄色（5Y8/3）シルト質極細砂（地山）
9　黒褐色（10YR3/1）砂礫（５～ 15cm の礫を多く含む）



第４図　トレンチ断面図（縮尺１/60）

第３節　墳丘（第３・４図）

墳丘は，第１節で報告したとおり削平が著しく，原型を留めていない。また，墳丘南側のトレンチ調査でも，周溝は確認されておらず，検出した墳端も本来のものであるかどうかは分からない。そのため，規模・形とも不明であるが，墳丘東側が大きく削平されていることから，石室が露出している付近を中心と仮定した場合，復元される規模は約 10 mとなる。他の古墳と比較して小規模であるが，現時点では 10 m以上の規模をもつ墳丘としか言及できない。なお，墳丘の高さは，県道およびトレンチ内の地山からいずれも現況で約 2.65 mを測る。

さて，トレンチ壁面で確認した墳丘断面観察では，版築により堅く締まった墳丘であることが分かる。第４図第２～６層が相当し，地山である淡黄色シルト質極細砂と，地山に何かを混入したと想定される褐灰色シルト質極細砂の互層によって，墳丘が構成されている。

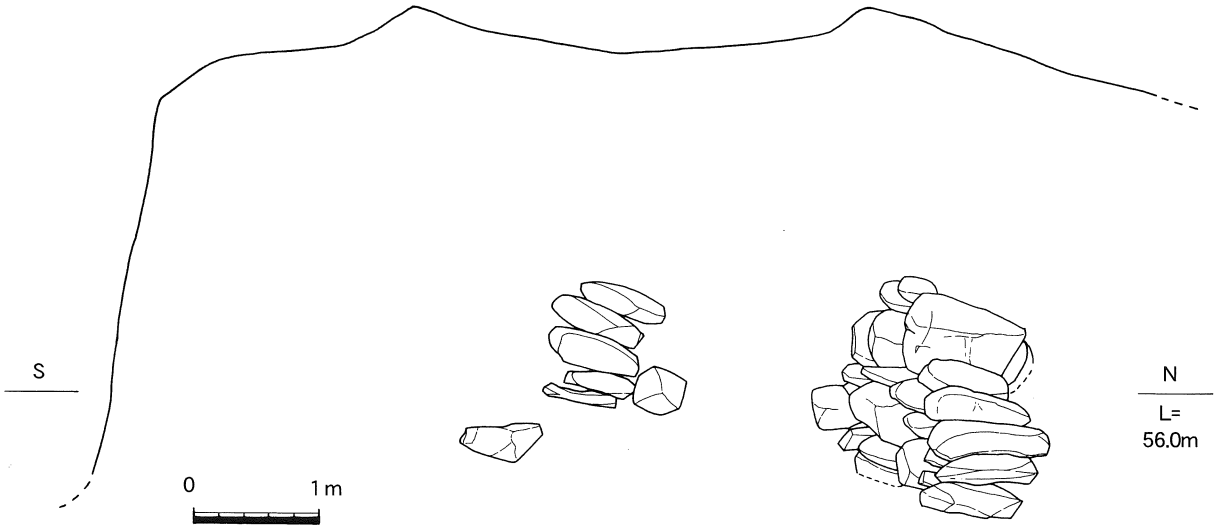
第４節　埋葬主体部（第５図）

墳丘東側斜面を精査したところ，地山から約 60 ㎝上を床面として，川原石の石積みが約 1.5 mの間をおいて相対することから，この石積みを側壁とした横穴式石室と判断した。石室の主軸は，N -100°-W前後を測ることから概ね東西方向を向いているが，開口方向は不明である。石室東側のみならず上部も失われており，石室の残存状況は良くない。なお，現状保存を前提としているため，精査に伴う掘削は小範囲に限られたものである。

石積みは，やや細長い川原石を使用しており，石材の小口側を石室内面に向けて揃えている。北側壁は，５～６段で高さ約 90 ㎝の石積みが残り，奥行きは３～４列で約１m分を検出したが更に奥へ続いている。南側壁は，１列分しか検出していないが，基底石近くの石１個と，内側に傾き倒れ掛かっている石列を確認した。石材の種類は，砂岩がほとんどだが，花崗岩や安山岩も少数認められる。これら石材は，香東川付近から調達されたものと推定される。

石室北側壁立面図

墓壙等は，掘削範囲が限られていたため，今回の調査では確認できなかった。床面には，敷石等は認められず，墳丘と同じ堅く締まったシルト質極細砂である。



第５図　墳丘東斜面における石室検出状況図（縮尺 1/30）

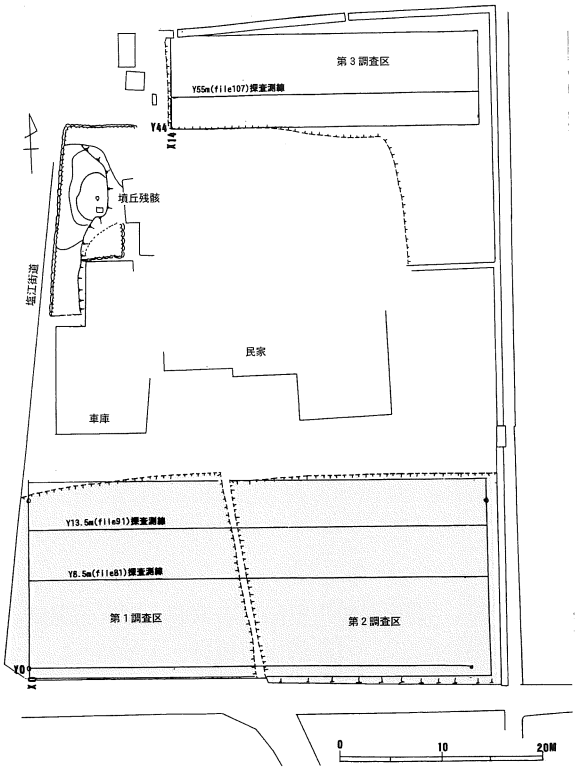
第４章　まとめ

第１節　古墳の年代

出土遺物がないため，詳細な年代特定は困難であるが，横穴式石室の特徴から類推してみたい。川原石を主体にして石室を構築する特徴は，龍満山１号墳の石室と共通している。どちらも香東川の東側に立地し，両墳は約２kmの比較的至近距離にあることから，何らかの関係があったものと類推される。ただし，龍満山１号墳の石室は比較的大きい花崗岩も使用しているが，舟岡古墳は現状では小振りの川原石のみであること，石室幅も龍満山１号墳が舟岡古墳より大きいことといった相違点が指摘できる。これが，時期差を反映しているのか，龍満山１号墳が独立丘陵斜面に立地するという石材確保の差異を反映しているのか即断できない。いずれにせよ，両者は時期的に近いものと考えられる。龍満山１号墳からは，大阪府陶邑編年（田辺 1981）の TK209 ～ TK217 古段階の須恵器が出土し（香川町教委 2003），７世紀前半の築造時期が想定されており，舟岡古墳も同じ頃に築造されたと考えられる。いわゆる古墳時代後期後半にあたる。

第２節　舟岡古墳と香川町内の後期古墳

舟岡古墳は，前述のとおり石室が川原石積みであることを最大の特徴とし，龍満山１号墳と共通している。この石材の選択が，香東川に起因することについても述べたとおりである。一方，香川町内と縁辺に所在する他の横穴式石室墳（東赤坂古墳，横岡山古墳，八王子古墳，万塚古墳）を概観すると，丘陵上にあり，石室構築にあたっては花崗岩を主体的に用い，部分的に川原石を使用している。両者を比較することにより，石材の相違について考察を加えてみたい。まず，古墳間の距離を見た場合，舟岡古墳と龍満山１号墳は約２kmに対し，舟岡古墳と八王子・万塚古墳は約１km，龍満山１号墳と横岡山古墳はわずか 350 mであり，距離によるとは考えられない。次に出土遺物が分かっている龍満山１号墳と万塚古墳を比べた場合，万塚古墳がやや古いが，大きな時期差は認められない。石室規模を比較した場合，舟岡古墳を除いて，東赤坂古墳，龍満山１号墳，八王子古墳，万塚古墳となるが，石室規模が起因しているとは考えられない。以上のことから，石室石材の相違は，築造の時期差が可能性としてあるものの，大きくは香東川から近い距離にあることに起因するもの（横岡山古墳は龍満山１号墳から近いが香東川に面しない）と考えられる。また，古墳を築造した集団の居住域も香東川に近いことから，日々の生活や精神に香東川が関与していた可能性も考えられる。



第６図　舟岡古墳周辺平面図（上原敏紳 2001 から）

第３節　舟岡古墳周辺の調査について

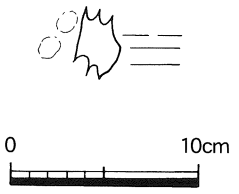
現在，舟岡古墳は単独で所在するが，一般的な後期古墳は群集していることから，舟岡古墳周辺にも他の後期古墳があった可能性がある。実際，舟岡古墳南側の水田（第６図）で実施されたレーダ探査およびボーリング調査によって，古墳が存在した可能性が指摘されている（上原 2001）。調査結果によれば，周溝をもつ直径 17 ～ 18 ｍの円墳が存在し，舟岡古墳と合わせて２基以上で構成される古墳群が存在したと想定されている。今回の調査で，舟岡古墳の時期が後期後半となったことから，後期古墳群が存在した可能性は高くなったと考えられる。

第４節　（伝）舟岡出土の舟形石棺について

現在，浅野小学校に保管されている舟形石棺は，もともと舟岡古墳周辺に水樋として利用されていたもので，そのため石棺の小口や造り付けの枕が削り取られている。この石棺の本来の出土地については，かねてから舟岡山の上にある舟岡山古墳（前方後円墳 or 双方中円墳）または平野部にある舟岡古墳といわれていた。しかしながら，今回の調査によって舟岡古墳が後期の横穴式石室をもつことから，舟岡古墳から石棺が出土した可能性はなくなった。一方，船岡山古墳についても，特殊器台が出土している可能性があること，墳丘が低いことを考えると，古墳時代前期前半の古墳となり，前期末～中期初頭の年代観をもつ石棺とは年代が一致しない。現段階では，浅野小学校保管の石棺は，舟岡山古墳と舟岡古墳の両方ともに出土した可能性は非常に低いと考えられる。

さらに，この石棺については，上原敏紳氏によって若干の考察と追跡調査が最近行われている（上原 2001）。氏によれば，舟岡山が江戸時代末期から明治時代初頭に石切場として利用されていたことが，石棺が舟岡山古墳から出土したという誤認を生むとともに，舟岡古墳周辺で実施したレーダ探査結果から舟岡古墳出土の可能性も否定している。今回の調査によって，その考えが補強されたことになる。

それでは，舟形石棺はどこから出土したのであろうか。ここで，上原氏が舟岡古墳墳丘から表採した円筒埴輪片を報告したい。摩滅が著しい細片だが，円筒埴輪のタガをもつ破片である。細片であるため，調整は不明で，正確な直径は復元できないが，比較的直径の大きい個体と考えられる。埴輪の詳細な時期は不明であるが，もちろん舟岡古墳の横穴式石室とは年代が合わない。この円筒埴輪を石棺と安易に結びつけることはできないが，関係を否定する材料も現在のところ見つからない。ここでは，舟岡古墳周辺に円筒埴輪をもつ時期の古墳がかつて存在し，そこから石棺が出土した可能性もあることを指摘するにとどめたい。



第７図　舟岡古墳表採円筒埴輪実測図（縮尺 1/4）

《参考文献》

上原敏紳 2001「香川県香川町船岡古墳および周辺遺跡」『墳丘のない墓の探査研究』天理大学遺跡探査チーム
香川町教育委員会 2003『龍満山古墳群～１号墳～』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

第５章　万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査

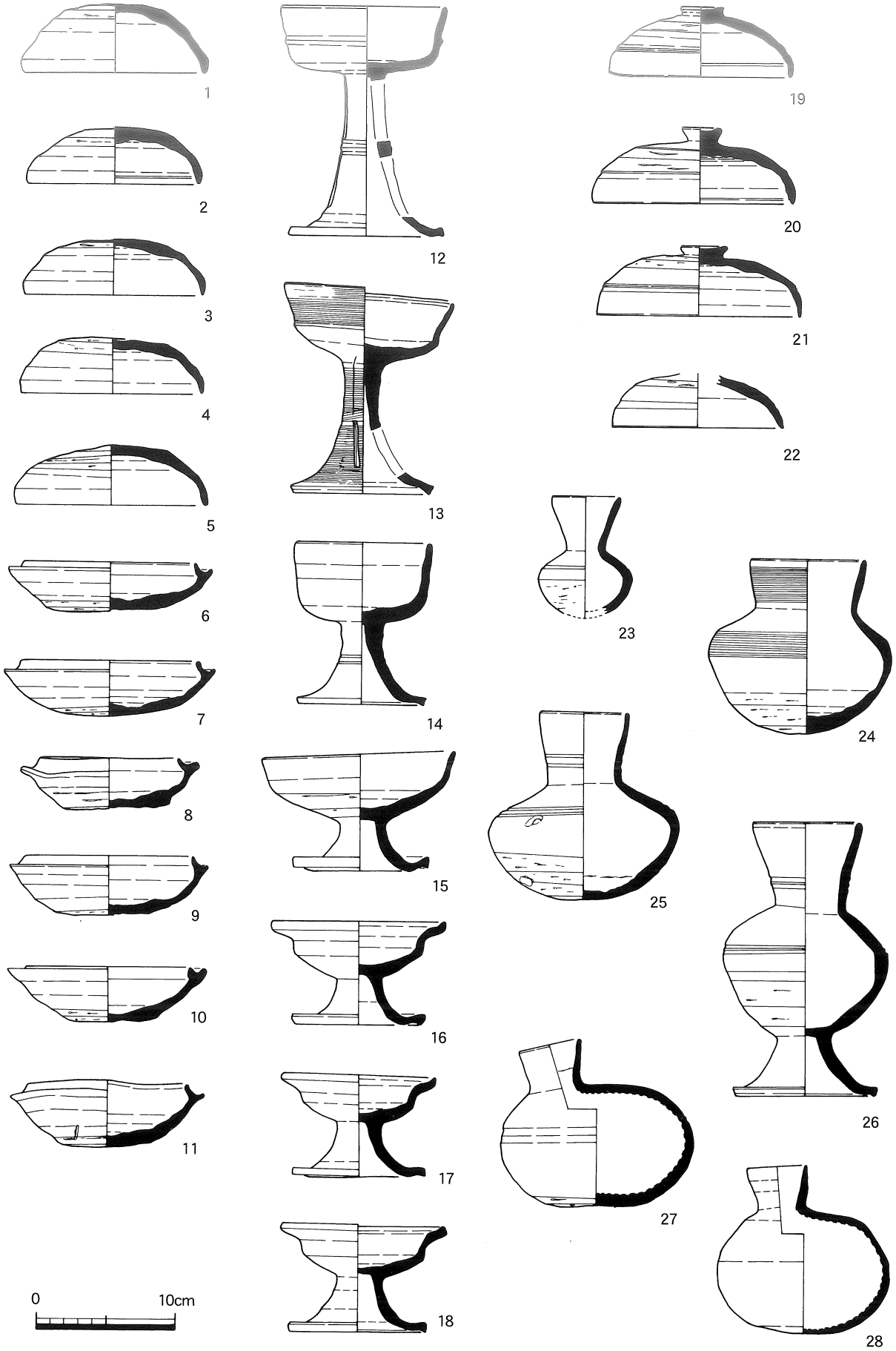
香川町立浅野小学校には，現在，香川町教委が所有している埋蔵文化財の一部が展示および保管されている。主に万塚古墳および剣山古墳から出土したものである。これら出土遺物については，今まで詳細な報告がなされたことがなかったため，今回報告するものである。

遺物の整理にあたっては，町教委が作成している『埋蔵文化財出土遺物台帳』に基づいた。台帳によると，浅野小学校保管遺物は，「万塚古墳」「剣山古墳」「八王子古墳・剣山古墳・万塚古墳」「東赤坂古墳付近」の４つに分けられている。このうち「八王子古墳・剣山古墳・万塚古墳」グループは出土地不明のものをまとめたものと推察できることから，「出土地不明」と読み替えた。遺物番号は，台帳に記載されている番号をそのまま踏襲している。また，今回の整理は，資料展示室のガラスケース内にある遺物を対象としており，ガラスケース下のコンテナにある細片は除外している。なお，台帳と一緒にある遺物写真アルバムによれば，（浅野）八王子古墳から出土した須恵器４点および剣山古墳№.15 の須恵器が行方不明となっている。

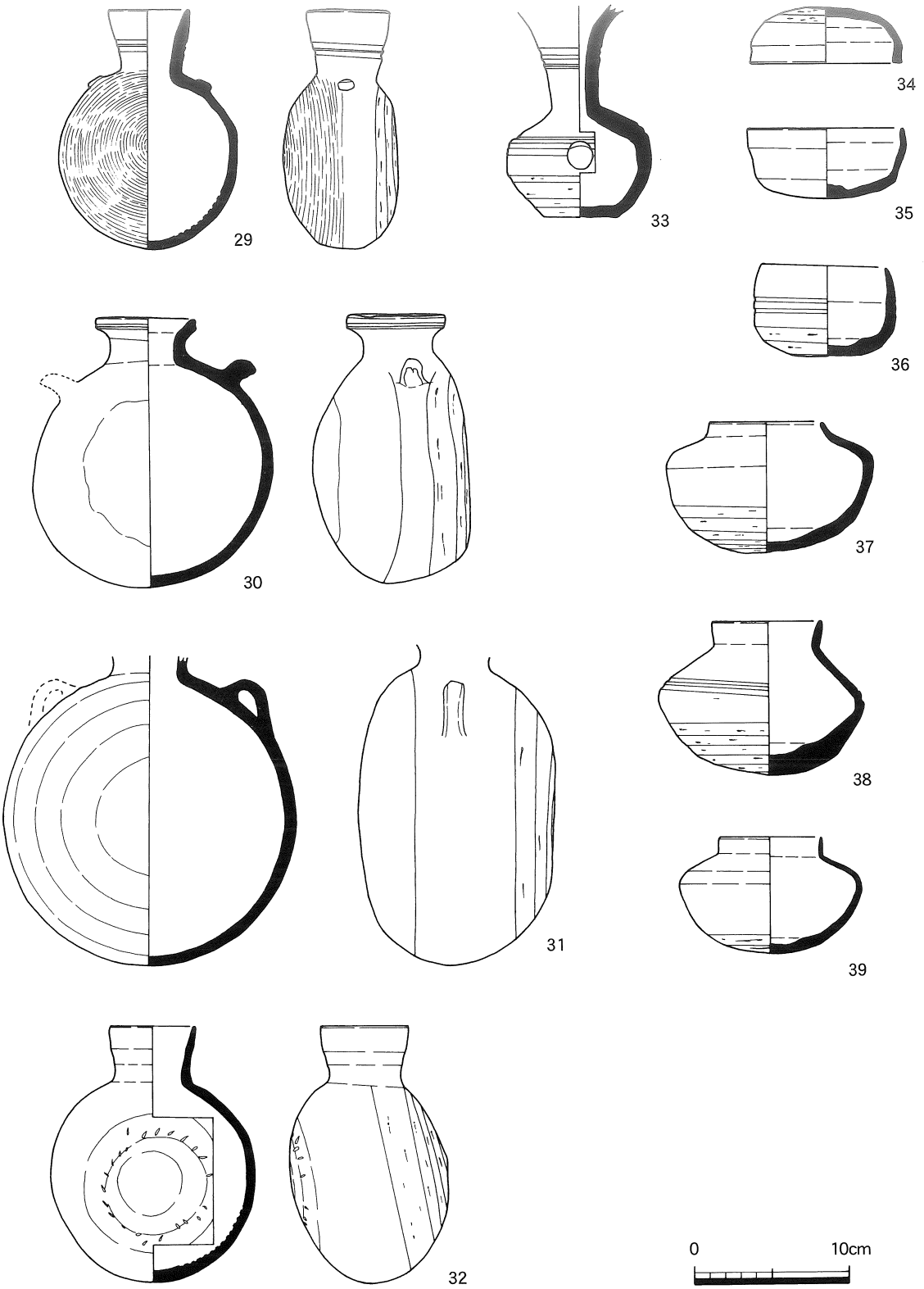
第１節　万塚古墳出土遺物（第８・９図）

万塚古墳は，正確には高松市仏生山町に所在した古墳である。古墳の詳細は，巻末に再掲した中原耕男氏が著した『万塚古墳発掘調査報告』にゆだねるが，片袖式の横穴式石室から多くの須恵器とともに耳環や鉄製品が出土している。

第８・９図に掲載した遺物は，すべて須恵器である。杯蓋（１～５）は，外面の稜も失われ，形骸化が進んだもので，口縁端部は丸く仕上げられている。口径は 12.2 ～ 13.5 cmを測り，器高の 1/3 ～ 1/4 が回転ヘラケズリで調整されている。杯（６～ 11）も，口縁部のかえりが短くなり，形骸化が進んだもので，口縁端部の段が失われている。口径は 10.0 ～ 12.6 cmを測り，器高の 1/3 ～ 1/4 が回転ヘラケズリで調整されている。無蓋高杯（12・13）は，長脚２段透かしのタイプで，杯部外面の段差がわずかに残っている。13 の外面には丁寧なカキ目が施されているが，脚部の透かし上段は貫通していない。台付椀（14）は，グラス状の杯部に短い脚部がつくタイプである。無蓋高杯（15 ～ 18）は，短脚がつくタイプで，脚端部が反り返って地面に接しないものがある。このうち 16 ～ 18 は，杯部をＳ字状に屈曲させており，高松平野では通常見られない形態的特徴をもつ。高杯蓋（19 ～ 22）は，頂部に扁平な摘みをもつものであるが，この蓋と組み合う高杯は見られない。口径は 12.4 ～ 14.8 cmを測り，器高の 1/3 ～ 1/2 が回転ヘラケズリで調整されている。長頸壺（23 ～ 25）は，肩が張った球形の体部に，やや長い頸部が付くタイプで，体部下半を回転ヘラケズリで調整している。23 は小型のものである。24 は，一般的な長頸壺より頸部が太く，カキ目が外面に施されており，短頸壺と中間的様相を示す。台付長頸壺（26）は，短い脚部が付くタイプで，体部下半は回転ヘラケズリが施され，頸部と体部中位に沈線がめぐらされている。平瓶（27・28）は，やや扁平な球形に短い口頸部が片寄って付くタイプだが，一般的な平瓶と比べて口頸部に比して体部が大きい。底部にのみ回転ヘラケズリが施されている。提瓶（29 ～ 32）は，扁平な球形の側面に短い口頸部と肩に把手が付くタイプであるが，様々な形態が見られる。やや大型で体部が扁平なもの（31）から小型で体部の球形化が進んだもの（29・32），把手が環状のものから退化して消失したもの（31 → 30 → 29 → 32），口縁部を外方へ屈曲させて端部を肥厚させるもの（30）から真上へ伸ばしただけで終わらせるもの（29・32）まであり，時期差を想定できる。29 の表面にはカキ目が，32 には刻目文が施されている。ハソウ（33）は，角張っ



第８図　万塚古墳出土遺物実測図①（縮尺 1/4）



第９図　万塚古墳出土遺物実測図②（縮尺 1/4）

た球形の体部にラッパ状に大きく開く口頸部をもち，体部中央に穿孔が見られるが，口縁部は欠損している。短頸壺の蓋(34)は，小型の杯蓋に似た形態だが，口縁端部の断面が四角で，外面に稜が残っている。杯(35・36)は，いわゆる杯蓋と杯の形態が逆転した時期以後のもので，36は深手で体部外面に沈線をめぐらし，底部には回転ヘラケズリが施されている。短頸壺(37～39)は，肩が張った球形の体部にごく短い口頸部が付き，底部は回転ヘラケズリが施されている。38は肩である最大径が体部中位まで降り，外面に沈線を施している。

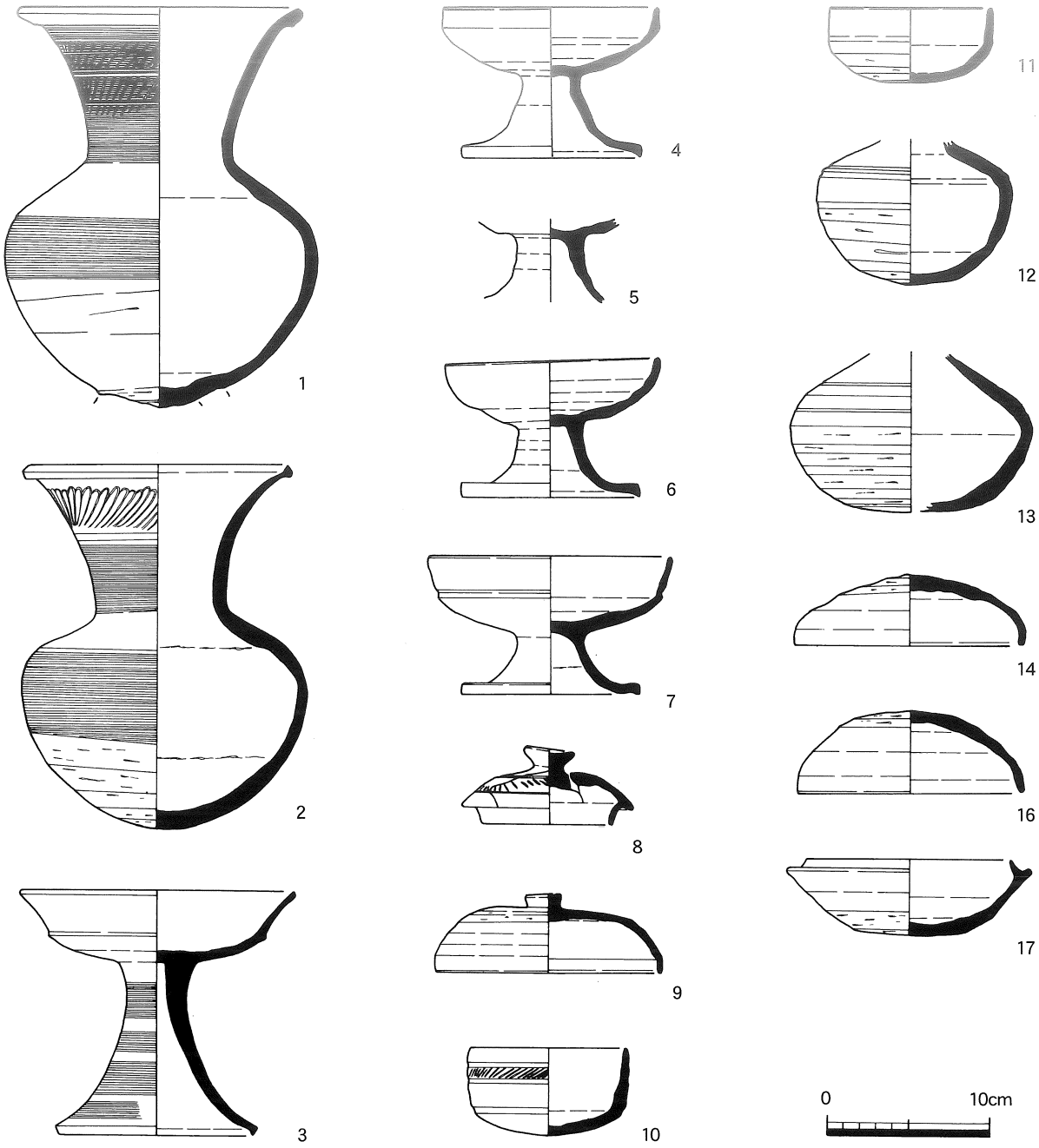
これら須恵器には，マジックでアルファベットが書かれ，または数字を書いたインデックスシールが添付されていることから，整理や貸出の際に注記がなされたと考えられる。一方，中原耕男氏の調査報告と比較すると，須恵器総数については報告では40点で現状では39点とほぼ数が合うが，器種ごとに見ると微妙に合わない。例えば，提瓶が報告では2点だが現状では4点あり，平瓶は報告では3点だが2点しかなく，高杯は報告では8点だが7点しかない。このため，現在は万塚古墳出土としている須恵器について，すべてを肯定することはできないが，後述するように一定の時期には収まるものであることから，一部(例えば20の高杯蓋)に他遺跡の須恵器が混入した可能性はあるが大部分は万塚古墳出土のものと考えられる。

さて，万塚古墳出土の須恵器は，大阪府陶邑編年(田辺1981)のTK209～TK217段階に相当すると考えられる。細かい時期差が存在するが，これは初葬後の追葬により生じたものと理解でき，TK209～TK217段階という時間幅は横穴式石室出土遺物では一般的なものである。杯蓋・杯はTK209段階が多いが，8・10は口径が小さくTK217段階まで下ると考えられる。長脚の無蓋高杯は，TK209新相～TK217古相のものであろう。短脚の無蓋高杯は，脚部の形態からTK217段階と考えられる。提瓶については，30・31が古い様相を示しTK209より前のTK43段階まで遡る可能性はあるが，古い型式が踏襲されている可能性もあり即断はできない。29はTK209段階，32はTK217古相段階と考えられる。35・36の杯は，TK217段階のものであろう。短頸壺は，おおむねTK209段階だが，一部TK217段階まで下るかもしれない。

第2節　剣山古墳出土遺物(第10図)

剣山古墳は，香川町川東下に所在した古墳で，剣山から最も北へ伸びる尾根の先端付近に立地していた。現在の香川町総合体育館から，道路を挟んだ南西方向にあたる。正式な調査がなされないまま消滅してしまったため詳細は不明だが，『讃岐香川郡志』(青井1944)によれば，「川東村には大字下村劒山頂より北一丁ばかりの峯に、住民が昔から相傳へて由緒のある所であると云はれてゐる所がある。それは昭和七年に龍滿忠義氏が其の一部を發掘した時、地下二尺許りの所から土器二箇が現はれた。一箇は破損し一箇は完全に掘出した。併し祟を恐れて發掘を中止した。蓋石等は散逸して存してゐない。側壁は石を以て築かれてゐる。」とある。

第10図に掲載した遺物は，すべて須恵器である。台付広口壺(1)は，やや肩が張った球形の体部に，ラッパ状に開く口頸部をもつが，脚部が接合面で剥がれて失われている。きれいに脚部が剥がれていることから，焼成時等に失われた可能性がある。口縁端部は外側に肥厚しており，頸部には刷毛原体による押圧文が，頸部および体部中位にはカキ目が施されている。広口壺(2)も，1と同様に，やや肩が張った球形の体部に，ラッパ状に開く口頸部をもつ。口縁端部は内面上方に摘み出しており，頸部には押圧文が，頸部および体部中位にはカキ目が施されている。ほぼ完存している。無蓋高杯(3)は，ラッパ状に開く杯部に，透かしの無い長脚が付く。杯部外面には段差が残っており，脚端部は下



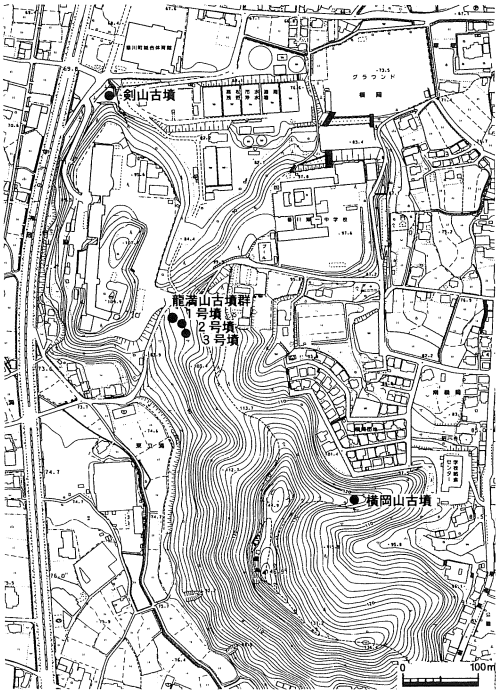
第 10 図　（伝）剣山古墳出土遺物実測図（縮尺 1/4、横岡山古墳出土遺物含む）

方に摘み出してしっかりと接地している。脚部外面にはカキ目が施されている。無蓋高杯（４～７）は，短脚がつくタイプで，口縁部は上方にのび，脚端部は肥厚して反り返っているものがある。蓋（８）は，長頸壺の蓋の可能性があるもので，かえりに長めの口縁部が付くとともに，大振りの摘みが付く。外面には，２条の沈線間に列点文が付く。焼成時に生じた亀裂のところで，２つに割れている。高杯蓋（９）は，頂部に扁平な摘みをもつものであるが，この蓋と組み合う高杯は見られない。口径は13.8㎝を測り，器高の 1/3 は回転ヘラケズリで調整されている。杯（10・11）は，いわゆる杯蓋と杯が逆転した後のものだが，両方とも深手で，10 の体部外面には３条の沈線と列点文をめぐらしている。長頸壺（12・13）は，肩が張った球形の体部だけの破片である。肩に沈線がめぐっている。杯蓋（14・16）は，外面

の稜も失われ，形骸化が進んだものである。口径は 13.8 ～ 14.0 ㎝を測り，器高の 1/4 は回転ヘラケズリで調整されている。杯(17)は，口縁部のかえりが短くなり，形骸化が進んだものである。口径は 12.8 ㎝を測り，器高の 1/3 は回転ヘラケズリで調整されている。現在所在不明である杯(15)も，写真を見る限り 17 と同様である。

剣山古墳出土の須恵器を概観すると，大きくは２時期に分けることが可能である。古い時期のものは，台付広口壺（１)・広口壺（２)・無蓋高杯（３)・蓋（８)である。１・２の広口壺は，大阪府陶邑編年のⅡ期に見られる器形で，口頸部に比して体部が大きく，体部の最大径も上位にあり，カキ目・回転ケズリも丁寧に施されていることから，Ⅱ期でも前半(MT-15・TK-10 段階）と考えられ，古墳時代後期前半である。３の高杯もⅠ期の高杯の退化型式と捉えることができ，８の蓋も摘みが大きくしっかりしていることから，広口壺と同じ時期であろう。一方，これら以外の遺物は TK209 ～ TK217 段階（Ⅱ期末～Ⅲ期初頭）に相当し後期後半と考えられ，大きな時期差が存在する。後期後半の須恵器は，横穴式石室が普及した時期であることから一般的に見られるものだが，後期前半の須恵器についてはそれほど一般的ではない。ここで『讃岐香川郡志』を再度検討すると，掘り出した時に土器１点は破損したが，もう１点は完全だったとある。台付広口壺（１)は破片をつなぎ合わせるとほぼ完形に復元でき，広口壺（２)はほぼ完形であり，『讃岐香川郡志』の記述と一致する。無蓋高杯（３)・蓋（８)の出土までは記載されていないが，１・２の須恵器については剣山古墳から出土した可能性が高いと考えられる。この場合，剣山古墳については，後期前半の築造時期が想定できる。

一方, TK209 ～ TK217 段階とした４～７・９～ 17 の須恵器について考えてみたい。『香川町誌』(香川町 1970) によれば，横岡山古墳から出土した須恵器を復元したところ約十点あり，これらを町教委に保管していると記述している。地元の中原耕男氏も同様の指摘をされている。現在，横岡山古墳から出土した遺物については展示ケースにも台帳にも見られない。ただし，ここで注意すべき事実は，剣山古墳や横岡山古墳そして龍満山古墳群は同じ独立丘陵上に立地し（第 11 図），この丘陵を地元の人々は住んでいる地域によって，剣山と呼んだり，横岡山と呼んだり，龍満山と呼んだりしていることである。すなわち，剣山古墳と横岡山古墳から出土した須恵器が，剣山出土として取り扱われた可能性がある。横岡山古墳出土遺物については,『讃岐香川郡志』によれば, 昭和７年夏の開墾時に「一、頸飾玉（二箇） 一、銅鐶（三箇） 一、石斧（一箇） 一、鋏製劔（一振） 一、土器数十箇（但し完全なるもの数箇)」が出土したという。鎌田共済会郷土博物館には土器の内訳が残されており (香川町 1993)，第 10 図とは若干の矛盾がある。ただし，横岡山古墳は一般的な横穴式石室をもつことから，出土した須恵器が TK209 ～ TK217 段階の時期でも相違なく, 剣山古墳の須恵器（４～７・９～ 17）の一部が横岡山古墳出土のものであっても矛盾はない。今後，更なる検証が望まれる。



第 11 図　剣山古墳周辺図
（縮尺 1/10,000）

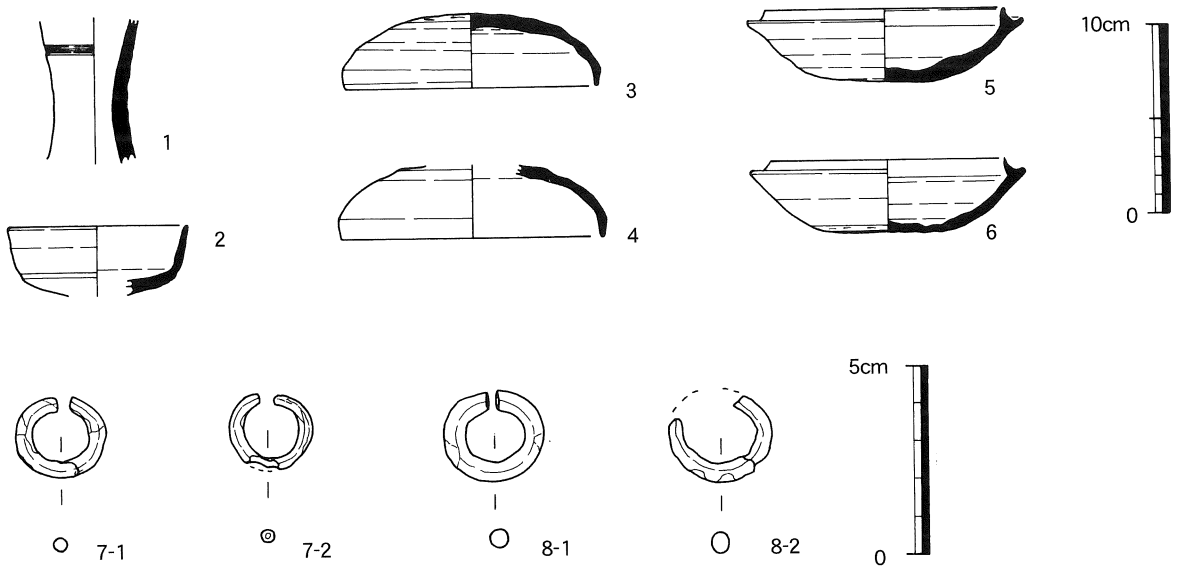
第３節　出土地不明遺物（第 12 図）

香川町の『埋蔵文化財出土遺物台帳』によると「八王子古墳・剣山古墳・万塚古墳」出土となっているが，個々の詳細な出土地は不明である。ほかに 70 点に分かれた鉄製品があるが，劣化が進んでおり，図化が難しいことから今回は報告しない。

第 12 図に掲載した遺物は，須恵器（１～６）と耳飾（７・８）である。長頸壺（１）は，頸部の破片で，２条の沈線が見られる。無蓋高杯（２）は，おそらく短脚がつくタイプだが，杯部の一部しか残っていない。杯蓋（３・４）は，外面の稜も失われ，形骸化が進んだものである。口径は 13.5 ～ 14.0 cm を測り，器高の 1/4 は回転ヘラケズリで調整されている。杯（５・６）は，口縁部のかえりが短くなり，形骸化が進んだものである。口径は 12.6 ～ 12.9 cmを測り，底部は未調整と器高の 1/4 を回転ヘラケズリで調整されているものがある。耳飾（７・８）は，７が直径 2.3 ～ 2.4 cmと８の直径 2.7 ～ 2.8 cm に比べて小型であるが，金環である。７と８はそれぞれ二個一組となっているが，この組み合わせが出土時まで遡るかどうか不明である。

さて，これら遺物の出土場所についてだが，須恵器（１～６）については特定できない。ただし，須恵器の時期については，大半が大阪府陶邑編年の TK209 段階に相当するが，２の高杯については TK217 段階まで下るものと考えられる。

一方，耳飾（７・８）については，万塚古墳と浅野八王子古墳から計４点出土していることが，中原耕男氏らの報告によりわかる。調査報告に掲載された写真を見る限り，耳飾(8-2)は浅野八王子古墳出土のものと似ているが，詳細に比較すると同一とは断定できない。一方，万塚古墳の調査報告と他３点の耳飾を比較すると，直径は違うが厚さは一致しており，直径を外側で計測せずに内側で計測していたり誤植があったとすると矛盾はないように考えられる。耳飾（７）が金環であることも報告と一致する。ただし，先述のとおり横岡山古墳から出土した銅環３点が浅野小学校に持ち込まれた可能性もあることから，これら耳飾が万塚古墳や浅野八王子古墳から出土したとは断定できない。なお，実測できなかった鉄製品についても，万塚古墳と浅野八王子古墳の報告書に鉄製品出土の記載があることから，両古墳から出土したと考えられるが，今後の保存処理等によって鉄製品の形態が明らかになった時に，細かな検討が必要であろう。

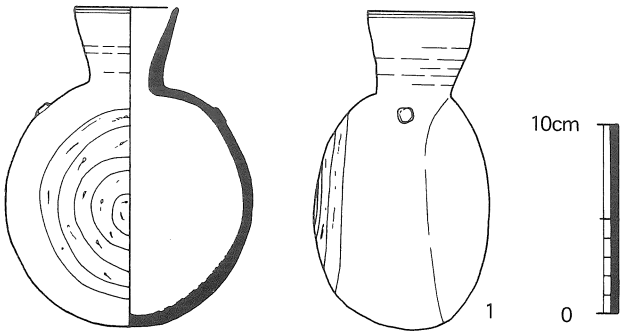


第 12 図　出土地不明遺物実測図（１～６は縮尺 1/4、７・８は縮尺 1/2）

第４節　下赤坂出土遺物（第 13 図）

展示キャプションによれば，平成 11 年に香川町大字浅野字下赤坂 2375（田）において，発見されたとなっている。この地点は，比較的大きな横穴式石室をもつことで知られる東赤坂古墳（町指定）より，北へ約 100 m離れたところである。

出土した須恵器提瓶（１）は，扁平な球形に短い口頸部が付き，口縁部の一部が欠けただけで完形に近い。口縁端部はほぼ直立しており，肩の把手もボタン状に退化していることから，大阪府陶邑編年の TK209 新相段階に該当すると考えられる。



第 13 図　下赤坂出土遺物実測図（縮尺 1/4）

さて，付近に所在する東赤坂古墳は，出土遺物は知られていないが，横穴式石室の様相から古墳築造時期は TK209 新相段階までは下らないものと考えられる。ただし，追葬が TK209 新相段階まで行われていた可能性はあるが，今回報告した須恵器提瓶は東赤坂古墳より距離があることから直接関係がある遺物とは考えられない。一つの可能性として，提瓶出土付近に別の古墳が存在した可能性が考えられる。一般的に，この時期の横穴式石室をもつ古墳は群集することが多く，今後，東赤坂古墳近辺において削平された古墳の痕跡が見つかる可能性が高いことを，この提瓶は示していると考えられる。

以上，報告してきたように，浅野小学校保管遺物については，一部に所在不明や混入が認められるが，全体的には良好に保管されている。今後は，不明遺物の追跡調査や木箱に入った細片の整理，鉄製品の保存処理等が必要であろう。最後に，平成 18 年 1 月 10 日をもって香川町は高松市と合併するが，これからも貴重な文化遺産を大切に保存していきたい。

《参考文献》

青井常太郎 1944『讃岐香川郡志』香川県教育会香川郡部会
井上勝之・中原耕男 1973「香川町浅野八王子古墳調査報告」『文化財協会報』第 58 号　香川県文化財保護協会
上原敏紳 2001「香川県香川町船岡古墳および周辺遺跡」『墳丘のない墓の探査研究』天理大学遺跡探査チーム
香川町教育委員会 2003『龍満山古墳群～１号墳～』
香川町史編集委員会 1970『香川町史』
香川町誌編集委員会 1993『香川町誌』
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
中原耕男 1971「万塚古墳発掘調査報告」『文化財協会報』特別号 10　香川県文化財保護協会
中村浩 1981『和泉陶邑窯の研究』　柏書房

万塚古墳出土遺物観察表（第8・9図）

※法量の()は，残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	遺物注記	備考
1	須恵器 杯蓋	13.0		4.9	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/3	やや粗	P 9	
2	須恵器 杯蓋	12.4		4.0	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	密	O	
3	須恵器 杯蓋	12.2		3.9	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	G 11	
4	須恵器 杯蓋	13.0		4.0	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰白7.5Y7/1	密	K	
5	須恵器 杯蓋	13.5		4.3	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	H	
6	須恵器 杯	12.6		3.6	外面:回転ナデ，底部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	A 3	
7	須恵器 杯	12.6		4.0	外面:回転ナデ，底部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白5Y8/1	密	F	
8	須恵器 杯	10.0	6.0	3.7	外面:回転ナデ，底部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	K 2	
9	須恵器 杯	12.2		4.2	外面:回転ナデ，底部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	やや粗	M	
10	須恵器 杯	11.8		3.9	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ，底部未調整 内面:回転ナデ	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:浅黄橙10YR8/4	粗	J	
11	須恵器 杯	11.5		4.8	外面:回転ナデ，底部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:オリーブ黒5Y3/1 内面:灰5Y4/1	密	G	
12	須恵器 無蓋高杯	11.8	11.2	16.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y4/1 内面:黄灰2.5Y4/1	密	D	脚部:沈線2条，透かし2段2方向
13	須恵器 無蓋高杯	12.2	9.8	15.0	外面:回転ナデ，カキ目 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	O	脚部:沈線1条，透かし2段3方向
14	須恵器 台付椀	9.6	9.0	11.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	H	脚部:沈線2条
15	須恵器 無蓋高杯	13.8	9.6	8.6	外面:回転ナデ，杯底部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	M 34	
16	須恵器 無蓋高杯	12.4	9.0	7.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	I	
17	須恵器 無蓋高杯	11.0	9.4	7.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白N7/	密	K	杯部外面～脚部内面:自然釉
18	須恵器 無蓋高杯	11.6	9.8	7.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y4/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	K	杯部外面～脚部内面:自然釉
19	須恵器 高杯蓋	13.2		5.0	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y4/1 内面:暗黄灰2.5Y3/2	密	L 15	
20	須恵器 高杯蓋	14.4		5.4	外面:回転ナデ，頂部1/2回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:黒N2/ 内面:灰7.5Y5/1	密		外面:自然釉
21	須恵器 高杯蓋	14.8		5.0	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白7.5Y8/1	密	E 14	
22	須恵器 高杯蓋	12.4		(3.8)	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰N6/	密	G	
23	須恵器 長頸壺	4.8		8.8	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰7.5Y6/1	密	25	
24	須恵器 長頸壺	8.1		12.6	外面:回転ナデ，カキ目，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	O	
25	須恵器 長頸壺	6.4		10.4	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	L 26	外面:自然釉
26	須恵器 台付長頸壺	7.6	10.0	19.7	外面:回転ナデ，体部下半回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰白5Y7/1	やや粗	F	
27	須恵器 平瓶	4.5		12.1	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	37	
28	須恵器 平瓶	4.1		12.2	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y4/1 内面:灰7.5Y5/1	密	D	
29	須恵器 提瓶	5.4	体部径 11.6	15.6	外面:回転ナデ，表側カキ目，裏側回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰7.5Y5/1	密	K	頸部:沈線2条
30	須恵器 提瓶	6.4	体部径 15.6	17.5	外面:回転ナデ，表側接合痕，裏側回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	I	口縁端部:沈線1条
31	須恵器 提瓶		体部径 12.8	(20.0)	外面:回転ナデ，裏側回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	H	
32	須恵器 提瓶	5.9	体部径 13.3	16.7	外面:回転ナデ，裏側回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰10Y4/1 内面:灰10Y4/1	密	44	体部:刻目文
33	須恵器 はそう		4.8	(13.3)	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:暗灰N3/	やや粗	E	頸部:沈線3条 体部:沈線3条，円孔1個
34	須恵器 短頸壺蓋	10.0		3.6	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/2 内面:灰白5Y8/2	粗	M 16	
35	須恵器 杯	10.0		4.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰オリーブ5Y6/2	密	W 17	内面全面～口縁部外面:自然釉
36	須恵器 杯	13.2	4.7	6.0	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:褐灰7.5YR5/1	密	F 18	体部:沈線2条
37	須恵器 短頸壺	7.4		8.5	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	やや粗		外面:自然釉
38	須恵器 短頸壺	7.2		10.0	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	密	G	体部:沈線2条
39	須恵器 短頸壺	6.6		7.5	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N5/	密	H 20	

(伝)剣山古墳出土遺物観察表(第10図)

※法量の()は，残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	須恵器 台付広口壺	17.0		(24.4)	外面:回転ナデ，カキ目，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ，ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰白N7/	密	頸部:刷毛原体による押圧文 内外面:自然釉，脚部欠損
2	須恵器 広口壺	16.0		22.2	外面:回転ナデ，カキ目，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ，ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N5/	密	頸部:押圧文 口頸部内面&体部外面上半:自然
3	須恵器 無蓋高杯	16.9	12.0	15.0	外面:回転ナデ，カキ目 内面:回転ナデ	外面:灰N3/ 内面:にぶい褐7.5YR6/3	密	
4	須恵器 無蓋高杯	13.2	11.0	9.2	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
5	須恵器 高杯			(5.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
6	須恵器 無蓋高杯	13.0	11.0	8.6	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
7	須恵器 無蓋高杯	15.0	11.0	8.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	杯部:沈線1条
8	須恵器 長頸壺蓋	7.8		4.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	密	上面:沈線2条，列点文 焼成時の亀裂あり
9	須恵器 高杯蓋	13.8		4.6	外面:回転ナデ，頂部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N5/	密	
10	須恵器 杯	9.5		5.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	体部:沈線3条，列点文 外面全面:自然釉
11	須恵器 杯	10.0		4.6	外面:回転ナデ，底部回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
12	須恵器 壺			(8.8)	外面:回転ナデ，体部下半回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	体部:沈線3条
13	須恵器 壺		3.0	(9.9)	外面:回転ナデ，体部下半回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰5Y6/1	密	体部:沈線2条
14	須恵器 杯蓋	14.0		4.3	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
16	須恵器 杯蓋	13.8		5.0	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白7.5Y7/1	密	
17	須恵器 杯	12.8		4.7	外面:回転ナデ，底部1/3回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰5Y6/1 内面:灰白5Y7/1	密	

出土地不明遺物観察表(第12図)

※法量の()は，残存値を表す。

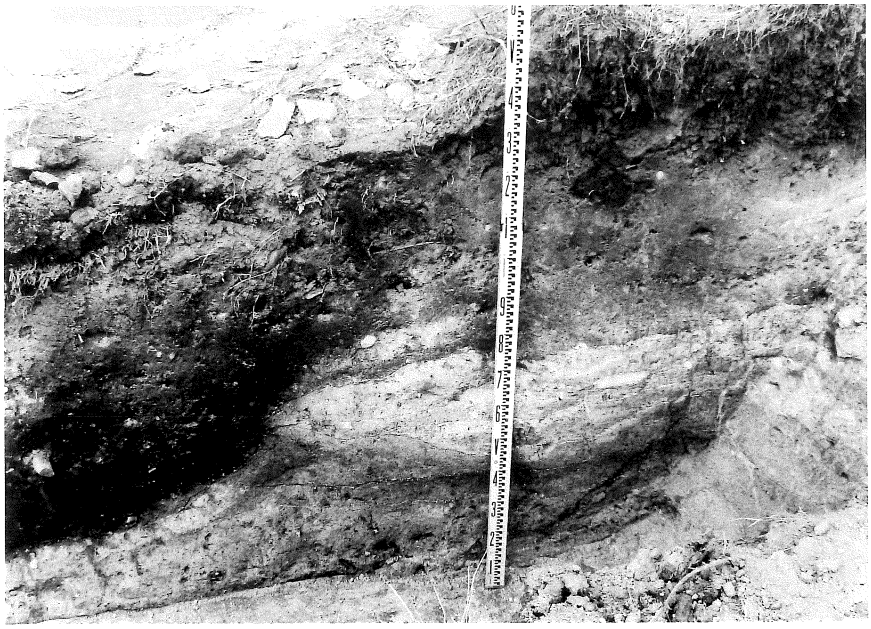
報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	須恵器 長頸壺			(7.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白N7/	密	頸部:沈線2条
2	須恵器 無蓋高杯	9.8		(3.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰白N7/	密	杯部:沈線1条
3	須恵器 杯蓋	13.5		4.0	外面:回転ナデ，頂部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:褐灰10YR6/1	密	
4	須恵器 杯蓋	14.0		(3.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	
5	須恵器 杯	12.9		3.9	外面:回転ナデ，底部未調整 内面:回転ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N5/	粗	
6	須恵器 杯	12.6		3.8	外面:回転ナデ，底部1/4回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
7-1	耳飾(金環)	2.4						
7-2	耳飾(金環)	2.3						
8-1	耳飾	2.7						
8-2	耳飾	2.8						

下赤坂出土遺物観察表(第13図)

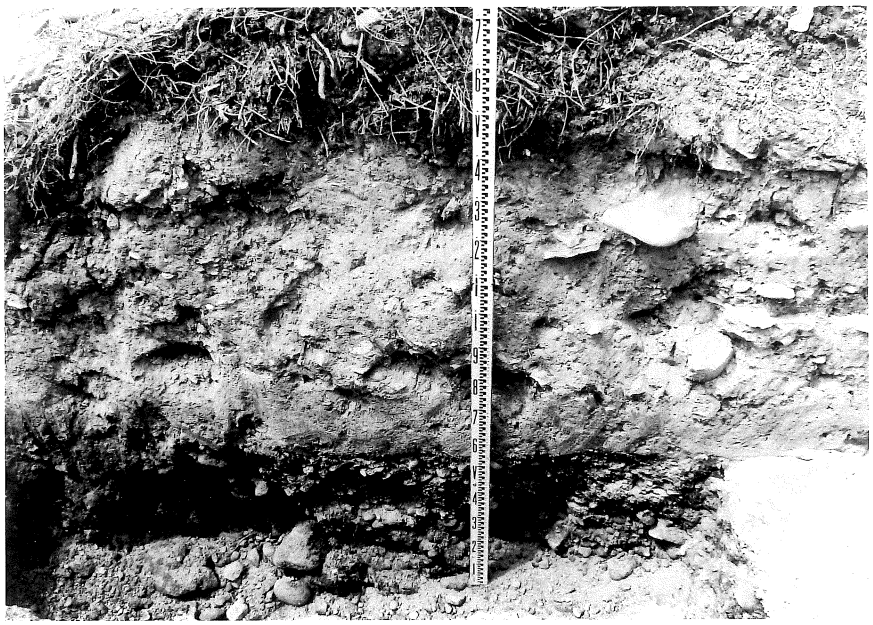
※法量の()は，残存値を表す。

報告番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	須恵器 提瓶	5.5	体部径 13.1	12.1	外面:回転ナデ，表側回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:暗緑灰5G4/1	密	

1　墳丘・トレンチ
全景（南から）



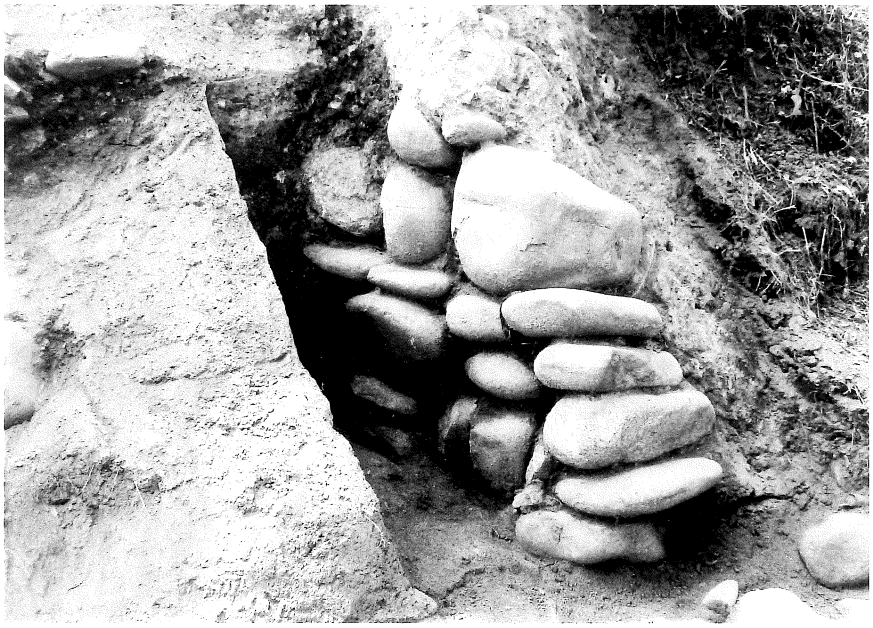
2　トレンチ西壁
北端（東から）



3　トレンチ西壁
南端（東から）

4　墳丘東斜面
（南から）

5　石室検出状況
（東から）



6　石室検出状況
（南東から）

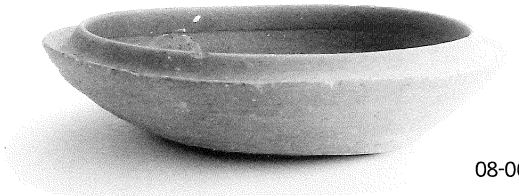
08-01

08-02

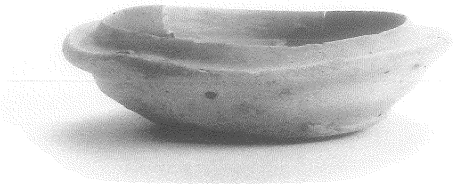
08-03

08-04

08-05


08-06

08-07


08-08

08-09

08-10

08-11

08-14

08-12

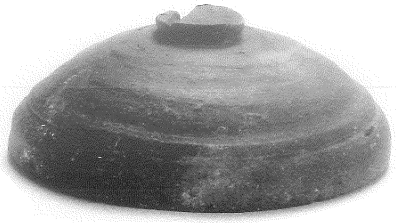
08-13

08-15

08-16

08-17

08-18


08-19

08-20

08-21

08-22

08-23

08-24

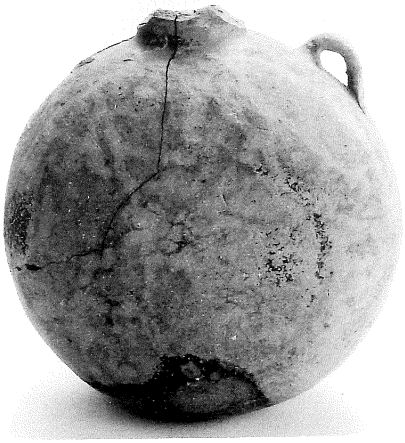
08-25

09-29

08-26

09-30

08-27


09-31

08-28

09-32

09-33

09-34

09-35

09-36

09-37

09-38

09-39

10-01

10-02

10-03

図版7　剣山古墳出土遺物

10-04

10-05

10-06

10-07

10-08

10-09

10-10

10-11

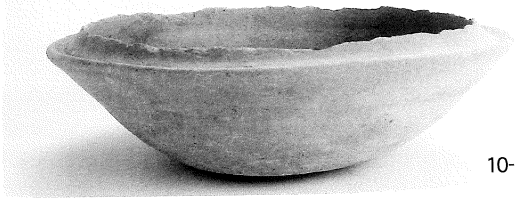
10-12

10-13

10-14

10-15

10-16

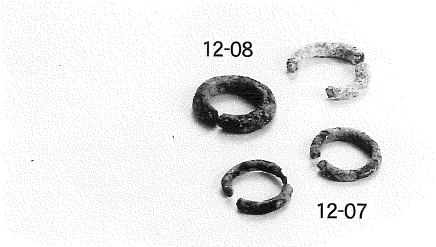

10-17

12-01

12-05

12-02

12-06



12-08

12-07

12-03

12-04

13-01

浅野八王子古墳出土遺物

3、坏

四点が出土しておりその中の一は、焼成のときに変形したらしく、全体に彎曲ぎみであり、焼きも悪く、粘土のような色調で胎土には砂粒を多く含んでいる。蓋受けのかえりの立ちあがりは垂直にちかく、全体としてはていねいに作られている。羨道部というより玄門わきに置かれていたもので、粘土層の中にあったもので、焼きのもどりがあったのかも知れない。蓋の部分は破片であるが、全形の察知できるものが一点あり、ろくろの使用跡は明瞭で、内側のつくりは雑に仕上げている。外周はよく整形がなされており、焼成もきわめて良好である。

4、高坏

上部は欠損して器台の部分が残っている。脚の部分は比較的薄くつくられ、横に広くなっていて安定した形をしている。焼成はよく、灰白色を呈している。

5、切子玉

水晶製で六角形をしているが、各面の広さは一様ではなく、つくりとしてはやや雑である。長さは一・七センチメートルで中央に貫通している穴の一方は径四・五ミリメートル、他方は三ミリメートルあり、中央がややふくらんでいるようすが、透けて見える。

6、耳飾り

ゆがみがひどく、酸化の著しい環が一個のみ出土した。環の厚さは三ミリメートル、環の径は二・五センチメートルほどである。

以上のほかに、完全な形ではないが特色のあるものに、小玉と鉄製馬銜がある。小玉は小さく砕けているが、径八ミリメートルほどの碧玉で、径一ミリメートルほどの穴も通っていたようすがうかがえる。また、玄室の南西隅より、錆のひどい、鉄製の馬銜片が出土した。腐蝕がはなはだしく、ほとんどは小さくわれているが、一部にみられる曲線などから馬具の馬銜という推定はできる。このほか、鉄製の鏃らしいものも出土したが、大きさや形状は計れないほど腐蝕している。

その他、須恵器片は細片であるが、きわめて多数が出土した。その中には、坏の破片に加えて、平瓶の口縁と思われるものや長頸瓶の頸部も混在している。さらに数片、小片ではあるが大きな壺の破片が出土している。表面にはくし目、裏面には間隔の狭い青海紋がみられ、焼きはきわめて固く、表面には自然釉がみられる。

なお、この古墳の遺物として直接関係のないもので、次の二、三のものが出土している。すなわち、長さ四・五センチメートルの石ぞくや弥生式土器片である。また、土師器片や支脚、それに、乳白色を呈する瓦器片も出土しているが、それらは、床面よりも五～十五センチメートルほど上部から出土したものである。

六、結語

弥生時代から開けたこの地域は、古墳時代、中期の古墳も点在しているので、往時の人々の生活空間であったことがしのばれる。やがて、古墳時代後期の横穴式石室墳も作られ、さらに、条里制の遺構は班田収授の法と関係が深く、画一的な行政機構へ組み入れられた事情を物語っている。

当地の横穴式石室に片袖式の多いことは、時期的な意味もさることながら、地域的な特色と考えることができるであろう。この八王子古墳は、現在でこそ独立した存在のように位置しているが、規模も小さく、丘陵の斜面部に在り、群集墳のうちの一基としての性格が強い。この丘陵上では他の遺構は発見されていないが、わずかに離れた万塚とのグループの中に位置づけることができると思われる。

羨道部および墳丘については既に破壊されており、丘陵上の地形も著しく変化していて、この丘陵上の他の古墳関係の遺構は不明であるが、八王子神社の北あたりから須恵器片が採集されるので、同時代の遺跡が存在したことを示しているとも受け取れる。

石室には、花崗岩のみでなく、川石も用いたことは、用石の不足によるであろうし、大規模に計画された古墳ではなく、家族墓的な色彩を持っていることを裏付けるものであろう。しかも、石室の築造も簡略化の方向にむかっていることを示している。

副葬品の須恵器の形式から、この石室内に葬られた時期は、少なくとも二期であったと考えられる。環と玉類の場所が異なっていたことも、その考えを否定はしない。須恵器の細片が散在していたことは、再葬で整理されたというよりもむしろ、石室内が攪乱されたためと考えられる。提瓶の退化して、形式化した耳や、小形の坩は、後期古墳期でもその終末に近いことを示している。

立地として、丘陵の東、北、西が利用できるなかで、あえて西斜面の上部に築いたことは、この古墳に関係の深い集落の範囲を限定させるものがある。

以上簡略な記述で、充分な考察もできていないが、とりあえず、八王子古墳の概況の報告にかえたい。

註1　「万塚古墳発掘調査報告」文化財協会報特別号十号

註2　香川町史

註3　香川郡史

註4　「大川郡にある二、三の古墳に就いて―黄泉国の葬送儀礼―」
文化協会報特別号第三集

三、古墳の立地および周辺の遺跡

この古墳は、標高で七十メートル、比高では二十メートル余りの、なだらかな丘陵の西端の西端に位置する。安山岩の風化した、赤褐色の土壌より成るこの丘陵の両側は、小さな谷をなしており、西側の谷は堰き止められて溜池となっている所が、この上方に三箇所ある。東側の谷には溜池は作られていないが、東西両谷の水は下流の大きな平地に集まる。この丘陵は、弥生式土器片およびサヌカイトの石鏃、石槍等、弥生時代の遺物の散布地であり、現在でもその採集が可能である。この東隅に八王子神社が祀られていて、地名に八王子が当てられている。

この位置から北方および西方には平野がひらけ、西へ約二キロメートルで、香東川岸に達する。北方の平野部には条里地形を認めることができるが、南および東には、なだらかな丘陵が続き、徐々に高さを増して山がちな地形に変わり、平野は少ない。

この古墳から北北東に六〇〇メートルのところが、平池の南東岸附近にあたりそこが万塚と呼ばれている所で、かつては多くの塚があったと言い、そのうちの一ヶ所は昭和四十五年に発掘された(註1)。この万塚の古墳は、全長七メートル、片袖式の横穴式石室墳であった。また、南東一キロメートルあたりには、全長六・八メートルの、片袖式にちかい形の横穴式石室をもつ、東赤坂古墳がある(註2)。北西には舟岡古墳、舟岡山古墳が望まれ、さらに、石清尾山古墳群を遠望することができる。なお、この学校の校庭には、かつて同村で出土して用水路の樋に使われていた舟形の刳抜式石棺が保存されている(註3)。

四、石室(古墳主体部)

羨道を西に向けた横穴式石室で、主軸は丘陵とほぼ垂直に交わる。玄室は、幅一・七メートルのほぼ等間隔で、奥行きは三・二メートルを計る。高さは、天井石および側壁の崩壊のため不明である。玄門は南側の壁のみが突出していて片袖式を示している。北側は、羨道、玄室をとおして壁はほぼ一直線をなしている。玄門あたりの狭部での幅は、一・〇四メートル、その長さは一・三五メートル程である。羨道のうち、北側には一個の壁が残っているが、南側には石列が欠け、その幅や長さは不明である。現在残っている羨道部最西端と奥壁までの長さは、五・二四メートルある。羨道部に残る一個の大石の端から南に、旧校舎のなごりをとどめる幅十二センチメートルのコンクリート壁が地中深く埋まっていて、ここより西の羨道部の遺構はない。

巨石は、北壁に二個、奥壁に一個、南壁玄門に一個残っており、鏡石の高さは一・一五メートルである。玄室壁の基盤はほとんど四十センチメートル内外の、さして大きくない石で築かれている。また、側壁には円礫も使われたらしく、所々の壁に円礫の詰めおよび、明らかに壁として積んだと思われるものもある。なお、床面に、一部壁として築かれていた円礫が崩れたものか、玄室中央あたりでは床面の礫の層が三重にもなっていた所があった。先述鏡石の幅は一・二メートル程度で、奥壁を埋めつくすことは出来ないが、南東隅の奥壁部には、基盤も根石群もない。

また、北東隅の側壁と奥壁の組み合わせは、奥壁の方が側壁の横にまで伸び、一般には、鏡石の両方から側壁が押される形をとっているのとでは対照的であり、当初、北東隅の側壁を鏡石と錯覚したゆえんもここにある。しかも、鏡石は床面下まで伸びて埋まっているが、北東側壁は、三個の石の上に積まれた状態で築かれている。玄門にあたる巨石は、いずれも基盤より一つの石で成り立っている。

床面の石はほとんど、川より運ばれたらしく、二十×十センチメートル程の円礫がならべられている。また、大きいのでは四〇×三〇センチメートル程度のものがあるが、一〇センチ内外のものも混在している。ただ、所々に、安山岩の角のある敷石もいくつか並べられていた。玄門あたりの中央部には石列があったが、壁ちかくにはそれもなく、粘土で固くかためられているようすがうかがえた。玄門あたりで出土した須恵器の坏は、いずれも固い粘土層の中から単独に出土し、まわりには敷石らしいものもなかった。

なお、玄室内のおもな遺物は床面より上、または敷石列の間より出土し、敷石の間および底部から見つかったものに、鉄製品と玉類・耳輪がある。なお、玄門部の固い粘土で固められたと思われるあたりから、粘土層に木炭片および灰と思われる黒い小さな粒状の塊が混在していた。そして、土師質の土器の細片も一部混じっていたが、きわめて軟質ですぐにこわれるほどであった。ここは、たき火の跡とまでは断定できなかったが、大川郡で発掘された古墳の例(註4)が想起されるので附記した。

五、出土遺物

ほぼ完全な形で出土したもの、および、復元により形の判別できる遺物は次のとおりである。

1、提瓶

口縁部は径三センチメートルでややゆがみがあり、高さは十二センチメートルで、全体の形はよく整っている。胴のふくらみは、直径九・五センチメートル、短径六センチメートルで、ろくろ使用のあとが鮮明にみられる。両肩の耳は小さく、三ミリメートルほどの半球の突起でできている。焼成は良好だが色調にはむらがあり、一方は灰白色、他方はねずみ色をしている。

2、坩

口径三・五センチメートル、高さ七センチメートルほどで、器形は整い、ゆがみは感じられない。口縁部にわずかに欠損箇所があるのみである。全体が濃いねずみ色を呈し、ろくろの使用跡も明瞭に残っているが、底部のつくりは雑で、整形がなされていない。

香川町浅野八王子古墳調査報告

井上勝之　中原耕男

【香川県文化財保護協会「文化財協会報　第58号」より抜粋】

所在地　香川県香川郡香川町浅野三〇八七の一
調査期間　昭和四十七年十一月六日～昭和四十八年三月三日
調査主体者　香川町教育委員会

目　次

はじめに
一、調査までの経緯
二、発掘の経過
三、古墳の立地および周辺の遺跡
四、石室（古墳主体部）
五、出土遺物
六、結語

はじめに

この古墳は、香川町立浅野小学校の運動場南部の端にあり、外見上では既に原形をとどめないまでに崩壊していた。古老たちの話で古墳らしいことがわかっていたが、近くに体育館の建設が予定されることになったため、古墳の実態がわからないままで消滅することを懸念して、発掘調査を試みることになった。

そこで、昭和四十七年六月二十七日、香川県教育委員会を通して文化庁に発掘申請を提出、同七月二十四日付けて文化庁より許可を得たので、発掘調査を実施した。

発掘は、香川町教育委員会が主体となり、香川町教育委員会職員、香川町立浅野小学校職員、香南町立香川中学校教諭中原耕男、香川大学教育学部附属坂出中学教諭井上勝之が調査に参加した。また、浅野小学校児童の有志も、率先して発掘に協力した。

一、調査までの経緯

この古墳の所在地は、もと、井上善五郎他三名の民有墓地であったが、浅野小学校校地拡張の必要から、大正十五年、近隣にあった旧浅野村有地との交換協定が成立し、浅野小学校の敷地の一部となった。

その折、墓地にあった享保十一年や延享二年等の刻銘のある墓碑は、交換地に移されたが、この古墳はそのまま残された。そして、某家の祖先の墓だという伝承もあって、一部では高敬の対象ともなっていたようであるが、いつの間にか忘れかけられた存在となっていた。

このようないきさつから、発掘に先立って、慎重を期するために、香川町教育委員会佐藤忠市氏らが、交換協定の事情経過を確認するために、旧墓地所有関係者との面談交渉に奔走し、旧墓地跡の発掘の了承を得た。

発掘調査は、昭和四十七年十一月六日、神事のあと開始し、昭和四十八年三月三日まで断続的に実施した。

二、発掘の経過

学校園の中に、あたかも庭園として配列したかのように、三個の巨石が乱立し、墳丘はおろか石室の向きさえも判断に苦しむ配置であった。

発掘は、内部と思われる所の土を除くことから始め、堀り進むうち、一個の巨石は天井石の崩れこみで、原形を全くとどめていないことがわかった。それをとり除いて堀り進むうち、新しく二個の巨石があらわれた。北隅と東隅の石の組み合わせから、南向きの横穴式石室であろうと予見して作業を進めていたが、南面延長のトレンチは、地表より五十センチメートルあたりで全く固い地層にゆきあたり、明らかに地山の土であることがわかり、発掘場所を西へ広げることにした。

南壁にあたる所には巨石は全く無く、石室の内部と思われる所から、旧校舎の残骸や焼却したと思われる塵埃のなごりなどが、八十センチメートルほどの深さで続いていた。これは、明治初期の旧校舎建設および、その解体の時点で、古墳の石囲いが塵埃焼却の場となっていた事情を示していた。やがて、灰の層に混じって、瓦器系の土器片が多くあらわれてきたが、これらは、墓地時代の遺物だと思われる。

そのうちに周囲の石列もほぼ現われて、片袖式の横穴式石室であることが判明した。先述の灰の層が終って十センチメートルほど掘り下げると、川原石の層が出はじめた。しかも、この十センチメートルほどの土が粘土質できわめて固く、ここから床面までの調査のために、以後ほとんどの日数が費やされた。この層になってから、土師片、須恵片が多く出土し、ほぼ完全な形で提瓶、坩、坏、切子玉各一個も出土した。異色のものとして、石鏃一個と石器用材のサヌカイト片数十個、弥生式土器片数個も出土した。ただし、これは附近に顕著な弥生遺跡があり、そのあたりの土を運んで古墳を築造したためであると考えられる。

玄室内に敷きつめられた敷石面まで掘りそろえ、ここで敷石列を実測した。さらに敷石列の底から耳環一個を得て石室内の作業は修了した。羨道部には旧校舎のコンクリート壁がうたれ、墳丘はすでに無く、周囲も運動場整地などで旧墳丘は範囲すらつかみ難く、この段階で調査を終えた。

い。しかし少なくとも六世紀後半ごろこの地域の鉄製利器の形態を知るうえに貴重な資料になる。なお、木質の付着跡が残されている鉄片などがあるが、今後時間をかけて調査していく必要がある。

6　馬　具

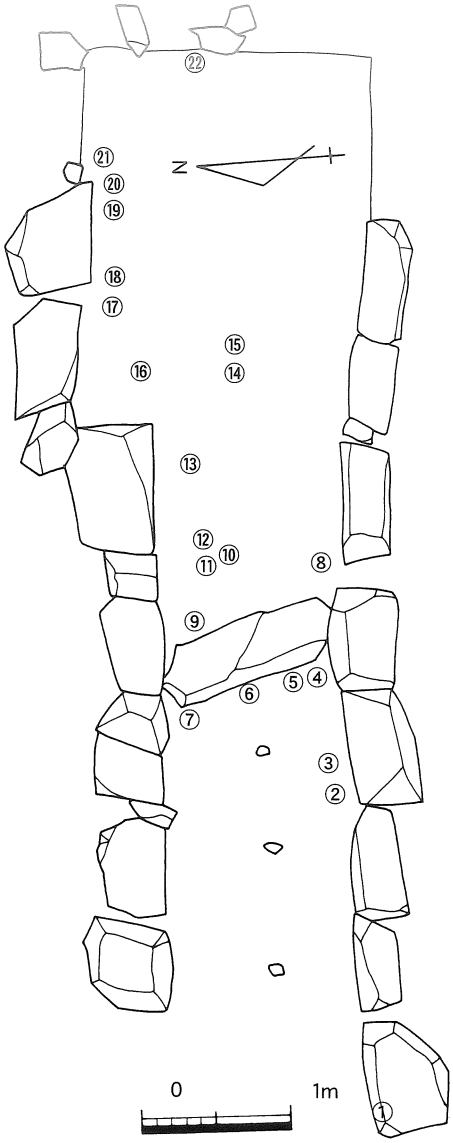
「しりがい」の交わるところに付ける飾りである雲珠と止金および方形の飾り五個である。雲珠は径三、八cm、飾りをふくめた長さは九、四cmである。四方の脚に径一cmの凸部が二個づつ配されている。止金は長さは五、五cm　幅三cm　厚さ〇、八cmである。馬具の飾りは二、七cmと二、二cmの短形が二個、一、八cmの方形のものが三個あり、中央部に高さ一cmばかりの宝珠のような凸部がある。たぶん腹帯かしりがいの飾りであろう。

五、おわりに

以上万塚古墳について概要を記したところであるが、従来万塚の地名はよく知られており、ここに古墳が群集をなしていたであろうことは考えられていたが、その実態は不明であった。はからずも今回の調査でただ一基だけではあったが、古墳群の一端でも知り得たことはありがたいことであった。

さてこの古墳は片袖式の横穴式石室の構造をもっており、この規模が貧弱であることから終末期的な様相をうけとることができる。

石室については残念ながら側壁の大部分を破壊され、根石と第一石程度がみられたにすぎない。しかし床面の保存状態は良く、副葬品を多数得られたことは本古墳の資料的価値を高めている。



第２図　平面図と出土位置

第１図　本遺跡および周辺遺跡の所在を示す地形図

◎ 万塚古墳　　① 東赤坂古墳
② 油山古墳群　　③ 横岡山古墳
④ 舟岡山古墳　　⑤ 舟岡古墳
※地図は昭和 56 年のものを使用

側壁の石組は、羨道、玄室ともに長さが約八五cm～三〇cm程度の石材を横にして一列に並べてあり、玄室の一部の石間は粘土で埋めてあった。奥壁は側壁より小さい石を縦に一列に並べられていた。

つぎに羨門であるが、南側壁端の石より西へ約〇、二〇mの地点で少しばかり低くなっていたことは確認したが、どのような設備がなされていたかはわからなかった。

床面の調査状況は仕切石から奥へ五〇cm、北側壁より三〇cmの位置で床面上から約一〇cmの層位から金環二個が発見された。その二個の間隔は約二〇cmで南北に並んでいた。さらに一個が南側の金環の位置より南へ約七〇cmに寄ったところで発見された。この一個の金環をどう解決すればよいのだろうか。

なお、金環の出た位置より東へ約一五cm離れたところで小玉二十三個、ガラス玉三個が出た。須恵器はそれらの大部分は横転、倒立などさまざまであり、割れているものが多かった。明けて十一日前日にひき続いて羨道と玄室の二班に分かれて床面の調査から始めた。須恵器の大部分は土砂に強く包まれており取り上げるのには非常に苦労をした。

太陽が頭上を過ぎるころ、鉄製利器の取り上げまで作業は進んだ。鉄鎌は羨門南側壁端より約二〇cm入ったところに刃を内側にして先を羨道に向けてあった。鉄刀は玄室の奥壁より約一、二〇mの北側に柄頭を西に向けてあったが、腐触がひどくてそれ以外は確認できなかった。鉄刀の西側に馬具の一部、東側に鉇三本が側壁にくっつくようにして、あたりを朱に染めていた。いずれの鉄器も床面より一〇cmばかりの層にあった。

日足は舟岡山の端にかかり、パワーショベルの爪は石室まで二mの距離に迫っている。もう一日の猶予が欲しい。出土した遺物は佐藤教育次長の手によって一点ずつラベルがつけられていく。石室床面の形状調査にかかる。石室全体は地山の上に川砂を約一、五mの厚さに敷きつめてあり、少しではあるが中央部が低くしてあった。羨門より玄室に向かってわずかに上り勾配がとってあった。これが排水を考えたものか、地形的なものであるかは全体の地形の観察ができていなかったので不明である。羨道の中央には直径約一〇cmの石が三個、ほぼ同じ間隔で配されており、祭壇に使ったものと考えられる。玄室には仕切石をはいった地点から直径三～四cmくらいの礫が川砂の上に置かれ、その上に粘土がうすく敷かれていた。それらを含めた厚さは約五cmであった。

千百余年の眠りからさめたこの古墳も日の光を浴びたのはわずか十日余で消滅の憂きめをみた。自然はひとたび破壊すればその再現は不可能である。まして形跡もなく消え去る墳丘をみるとき充分な実測をなし得なかったことに対する後悔の念と、古代人の生活の一部に触れた充満感との錯雑した気持ちが夕映えの情景と相まっていっそう高ぶりを覚えずにはいられなかったのである。

四、遺物

検出された副葬品は、金環三個・小玉二十八個・ガラス玉四個・鉄刀一振・鉄鎌一・やりがんな三・馬具の一部および須恵器四十点であった。それらの出土位置は別図のとおりであり、その出土層位はほとんどが床面より約一〇cmあがったあたりであった。

（A）羨道（①～⑦）

①坏（器中に木炭ガラ）椀、高坏、平瓶二、坩、鉄鎌一、②坏、③坏、坩、④椀、坏、高坏、⑤蓋坏、はそう、⑥提瓶、⑦坏二、坩、長頸坩、高坏三。

（B）玄室（⑧～㉒）

⑧高坏、提瓶、⑨金環、⑩金環、⑪金環、⑫小玉二十三個、ガラス玉三個、坏、⑬坩、⑭椀、坏、脚付長頸坩、⑮平瓶、高坏、⑯蓋坏、長頸坩、⑰馬具、⑱坏、坩（器中に小玉五、ガラス玉一）、高坏、やりがんな三、⑲鉄刀、⑳鉄片、㉑鉄片、㉒坏。

1　金環

銅の金張り品で直径一、六cm　厚さ〇、三cmのものが二個、直径一、八cm　厚さ〇、五cmのものが一個である。二個をもって一揃いとすると一個忘失であるが見出すことはできなかった。この金環、小玉、ガラス玉と後述の鉄刀の位置を考え合わせるとき、埋葬法は玄室の入口に頭位を西にして納置したものと判断をくだすことができる。

2　小玉・ガラス玉

小玉は径〇、四cm　厚さ〇、四cm、ガラス玉は径〇、六cm　厚さ〇、八cmの紫色でいずれも中央は少し扁平である。中央部に直径〇、一五cmの通し穴があり連珠したものであろう。

3　鉄刀

鍔から一一cmのところで折れているため全長は不詳である。刀身の幅は残存部で三、八cm、棟の厚さ〇、六cmをはかる。鍔は数多くに割れているので、縦横とも径がわからないが、厚さは〇、六cmで別図のような文様が刻まれている。茎は長さ約一、五八cm　幅二cm厚さ〇、八cmの圭頭で柄頭は原形がない。全体を上質の粘土で包んでいた形跡がうかがえる。

4　鉄鎌

とりあげる前の全長は一九、八cmで先端部は折れまがっていた。現存の長さ七、一cm　幅三、四cm　棟の厚さ〇、四cmである。目釘穴があり、ほぼ直角に短柄をつけていたものと思われる。この鎌が実用品かどうかは今の段階ではわからない。

5　鉇

全長はそれぞれ二〇、二cm　一二、九cm　八、四cm、幅は広い部分で一cmをはかり、しだいに方形から円形に変わりつつ細くなっている。厚さは〇、六～〇、三cmであり剣身形をなしている。これも鉄鎌と同じように実用品か祭儀の土木建築道具かは早計は許されな

万塚古墳発掘調査報告

中原耕男

【香川県文化財保護協会「文化財協会報　特別号１０」より抜粋】

一、はじめに

開発と保存はいずこも問題化しているが、この小さい古墳もまた進展する土木工事の犠牲となった。この古墳の発見は、道路工事用の土砂採取をしていたとき、畑（果樹園＝柿）の所有者であった多田弥一が須恵器二個を見つけたことに始まる。それは年の瀬もおし迫った昭和四十四年十二月下旬のことであった。発見者はただちに香川県教育委員会、香川町教育委員会および浅野警察駐在所へ届け出た。

知らせを受けた香川県教育委員会では、すぐに筆者に調査を命じられた。そこで現場におもむいて、踏査をしたところこれが古墳の遺構の一部であることを確認した。そして香川町教育委員会と打ち合わせた結果香川町教育委員会が発掘主体となり、土砂採集の進捗状況からみて、昭和四十五年一月十・十一日に緊急調査として発掘することになった。発掘担当は香川町教育長二川一美、同教育委員会主事佐藤武仁の両氏と筆者があたり、発見者をはじめとする地元の方々や香川第一中学校社会科クラブ員十数名の協力を得て発掘をした。

二、環境

1　万塚古墳の位置

行政区画上では高松市（仏生山町三一二〇―四四番地）となっているが、香川町大字浅野との境界からわずか十数ｍ北に寄った所にあり、琴電バス赤坂線の実相寺停留所西側の役料池から西へ五〇〇ｍばかり行き詰めた所に位置する。北に高松藩主の菩提所である法然寺があり南東に、実相寺山（海抜二〇〇ｍ）があり、西は平池に突き出した丘陵地（一二〇ｍ）である。（地図中◎印地点）さらに遠くを眺めると島々の浮かぶ瀬戸内海を一望におさめることができる。この景勝地の自然丘を利用して古墳を築き上げた古代人の姿が脳裡をかすめたのは筆者ひとりではなかったであろう。

この付近一帯は「万塚」という地名が示すように多くの塚があったらしい。土地の古老の話では耕作中によく石にあたり、その都度石を掘り出していたとのことである。また、この古墳より北東三〇〇ｍの小森谷池の松林には約六㎡の石室があって、格好の遊び場所であったことも語ってくれた。なお南へ一〇〇ｍばかり離れた墓地には組合石棺などに使用されていたと思われる石（長さ一、三〇ｍ　幅〇、七五ｍ・長さ〇、八ｍ　幅〇、四ｍなど）が多く残存している。それらの石材はその位置より南東へ約一〇〇〇ｍばかりへだてた実相寺山の石が多い。このような周囲の状況からみて綾歌郡綾南町滝宮や同郡綾歌町岡田の万塚と同じ時期に、この地域にも群集墳がつくられていったものと考えられる。しかし、現在はいずれも残されていないのが残念である。この古墳もその地名をとって「万塚古墳」と呼ぶことにした。

2　付近の古墳

香川町内にあるおもな古墳は地図中の①～⑤に示すとおり、山頂または山麓にあるものが多い。①は「ひょうげ祭」で有名な高塚山麓にある東赤坂古墳で、横穴式石室をもつ円墳である。②は新讃岐百景のひとつである立満池の北にある油山古墳群で五基ほどあったが、宅地造成によって土砂がおおいかぶさり、今はそのおもかげをとどめていない。③は香川第一中学校の南にある横岡山古墳で、香川郡志によると「玄室および羨道を有する片袖形石槨であり、昭和七年に発掘された。出土品は頸飾玉二個・銅環三個・石斧一個・鉄製剣一振・須恵器数十個。」と報告されている。④は琴電バス塩江線の舟岡停留所の西にある舟岡山上にあるもので、円墳か前方後円墳のどちらかであるが、（松浦正一氏踏査）未発掘の古墳である。⑤は舟岡古墳で国道一九三号線沿いにあり、わずかながら形跡を残している。衆知の刳抜石棺（浅野小学校保存）が出土した古墳である。（松浦正一氏報告）

このように香川町北部をとりまく山々のうち、実相寺山付近が万塚という地名がありながら、いまだに古墳が見出されていなかっただけに、この古墳の発見は町内一連の古墳群の研究はもとより高松市南部の古代史の探求に重要な資料を提供し得るものになるであろう。

三、発掘の経過と概要

墳丘は存在したかもわからないが、現地に臨んだときは、写真１にみられるようにすでに上位部分はすべて削り取られて、石槨の最下部の石だけしか残っていなかった。したがって古墳をとりまく形や外部施設の観察や記録をとることはできなかったが、地元の人の話では古墳のあった部分は少し高くなっており、大きい石がときおり出たという。

二川教育長のくわ入れ式後、ただちに石室の全容をみきわめることから作業を始めた。地質が旧期扇状地堆積物の砂礫交り粘土であるだけに作業は思うようにはかどらなかった。それだけにこの墳丘の築造に動員された多くの古代農民の労苦をしのばずにはいられなかった。

石室は主軸をほぼ東西にとり、羨道の長さは羨道部より仕切石の中央部までが約三、〇ｍ　幅一、二〇ｍ　玄室の長さは仕切石を含めて奥壁までが三、九八ｍ　幅は片袖口部のところで一、八二ｍ　奥壁が一、八〇ｍと北側壁部へ〇、六二ｍひろがった片袖形石槨となっている。しかし、羨道部北側壁と玄室の奥壁の石組の一部が取り去られていたので正確には計測ができなかった。なお、仕切石の長さは最長部で一、二〇ｍ　幅は最も広いところで〇、三三ｍであり、底面部は地山の上に直接置かれてあった。

報告書抄録

ふりがな	ふなおかこふん　つき　まんづかこふん・つるぎさんこふんとうしゅつどいぶつのちょうさ
書名	舟岡古墳　附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査
副書名	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	中原裕二，川畑　聰
編集機関	香川町教育委員会
所在地	〒761-1795　香川県香川郡香川町川東上 1865 番地 13　TEL 087(879)0231
発行年月日	平成１７年１２月１６日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
舟岡古墳（ふなおかこふん）	香川郡（かがわぐん） 香川町（かがわちょう） 浅野（あさの）	37362		34° 16′ 6″	134° 1′ 5″	H17.9.1 ～ H17.9.2	10 ㎡	個人住宅 改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舟岡古墳	古墳	古墳時代後期	墳丘 横穴式石室		

要約	舟岡古墳は，平野部の微高地上に立地し，川原石積みの横穴式石室を主体部とする後期古墳であることが，今回の調査で分かった。また，合わせて報告した万塚古墳や剣山古墳等出土遺物の調査は，これまで未報告であった香川町内の古墳出土遺物の概要を初めて公開したものである。

舟 岡 古 墳
附 万塚古墳・剣山古墳等出土遺物の調査

編　集　香川町教育委員会
　　香川県香川郡香川町川東上 1865 番地13
発　行　香川町教育委員会
発行日　平成 17 年 12 月 16 日
印　刷　有限会社　中央ファイリング